

---

# 時報

---

No.6

1954.6

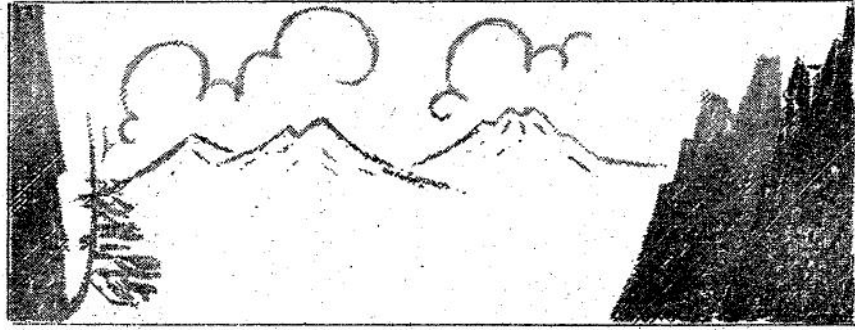
大阪大学山岳会



○ 巻頭写真

天狗のホルC Iにて”

一九五四年一月一日 川島 勇 撮



## 時 報 第六号 目 次

- |                |      |
|----------------|------|
| 一、失なはれた登山技術    | 篠田軍治 |
| 一、極地法の運営について   | 尾藤昭二 |
| 一、冬山報告         |      |
| 天狗のコルより槍へ（極地法） |      |
| 一、春山報告         |      |
| 春の黒部へ          |      |
| 一、装 備          |      |
| （一）ナイロンテントについて |      |
| （二）寄附報告        |      |
| 一、山行記録         |      |
| 一、集会記録         |      |
| 一、会員名簿（省略）     |      |

# 失はれた登山技術

篠田軍治

物理学の実験をやるのには硝子細工と写真が必要だということは学生時代に耳にたこができる位に聞かされた言葉である。併し、今となってみると写真は相変わらずあるが、硝子細工の方は事情が一変した。昔の物理学者の中には硝子細工が旨いために、よい研究ができた人もあり、化学者の中でも登山家として有名なラムゼーの多数の稀有瓦斯の発見の蔭には優れた硝子細工の技術があったことも亦有名である。所が、今では真空装置にも硝子をあまり使わなくなった。それと同時に硝子細工の練習もあまり必要でなくなり、その技術は半ば失われてきた感がある。

これと同じようなことが登山技術にも確かにある。道を間違えずに正しく歩くこと、これは登山技術の初めであって、終りであるとも言われており、事実道を間違えるということは常に致命的な結果を招くことが確かにあった。今でもルートを見付けることが登山に最も必要なことには変わりはないが、岩登りの技術が発達して大抵の所は通れるようになってきたので少々道を間違えた位では別に遭難の原因にはならなくなって来た。そうなってくると道に対する感覚が確かに鈍くなる。道の新旧、峠の上に通じる古道か、それとも木樵の道か、こんなことを判断する能力が確かに不足してきたようだ。この程度ならまだよいが鉋目を見付ける能力の不足、沢から尾根への取付点を間違えたりするようでは困る。夏山の合宿中の行動は兎も角として、楽しかるべき合宿解散後の山歩きが台無しになってしまうようなことがないとも限らない。

こうしたことに案外無関心になったことには装備の進歩、それに伴うビヴァック法の進歩も与って力があるようだ。以前は天候の悪化した時の不時の露営は惨めなものだった。防寒具は不完全だったし、頼みの焚火は中々燃えつかない。飢えと寒さに惨憺たる一夜を送るのは決して有難いものではなかった。こんな時に猟師ならば簡単に火を起すが学校山岳部の部員はこの点では猟師に遠く及ばない。こんな悩みも携帯燃料の発達で大体において解消した感があるが、一面徒らに荷物が増え焚火の技術の低下の原因になっているようだ。

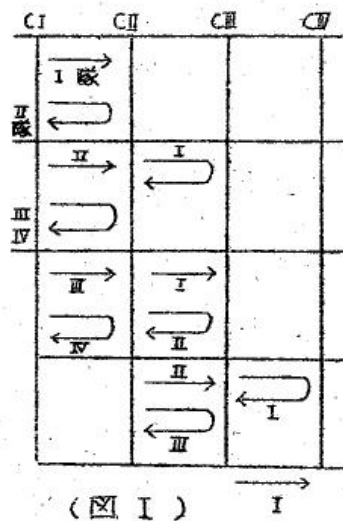
これと同じようなことが渡渉の場合にも言える。谷歩きをして、行き詰まってから引返して渡渉点を見付けて向う側に渡る。暫く行くと又行き詰まって渡渉する。こんなことを繰り返すのが一番拙劣な谷歩きとされていた。従って谷歩きには渡渉点を見出すこと、渡渉の技術は共に重要な技術であった。

黒部の平の小屋から東沢の出合までの間で自分達が且て二回の渡渉で避けて通った岩壁を数年前の阪大の隊は直登している。時間はこの方がかかったがようだが、嘗ての自分達が同じことをやったらもっと時間がかかっているに違いない。岩登り技術の進歩は確かに無用な渡渉の回数を減少させることには大いに貢献しているが、昨年夏のような未曾有の増水に出会うと何となく弱点を暴露するような気がしてならない。あの中央線の不通になった頃、涸沢合宿中の学校山岳部の中には相当なヴェテランの揃っていた所でも、橋が落ちたら大変だと大部慌てていたようだ。こんなことも渡渉を豊富に持った谷歩きに親しんでいないこととその結果として長雨が続いた時の逃げ道というものに対する感覚が鈍いためではなかろうか。

ついでながら述べておきたいことがある。よく山登りの本に渡渉の時には五尺位の丈夫な杖を上流の方につくとかザイルを使うとかという方法が載っているが、流れが急で深い時は自分にはどちらも一寸出来そうもない。これは自分の技術が下手なためかも知れないが同じような人が他にあっても差支えない筈である。邪道かも知れないが、身長よりも遙かに長い杖を下流側に突いて、あまり大きく川下に流されないように渡ることになっている。

極地法登山は、よく言はれる様に正に人の縦への和によるより広範囲な行動の登山形式である。その“人力の縦への和”といふ事は、一人の単独者乃至一パーティがあるコースを初めから終り迄単独にすべて登山する（登頂は勿論偵察、荷上げ等すべて）のではなく、そのコースに於て多くの人間が有機化された組織のもとに、各人が各々登山といふ行動の各要素を分ち合ひ、それらの総合に於て一つの登山といふ行動が完成されるといふ意味であらう。従つて其処には、異なる場所で何人かの人間が同時に有機的に行動するといふ点に於て、極地法はあく迄運動的状态として思考せられねばならない所にむつかしさと複雑さがある。其の滑かな合理性の動きにのみ見事な極地法が完成されるのだ。人体の動きという物は、各要素の極めて巧妙な調和ある有機的動きであるが、それが反射といふ自然現象に負ふ所大であるが、丁度それに比べて考へられる物は、各メンバーの登山家としてのレベルの高さと計画の熟考にたとへて考へられよう。それはとも角として、此処では、この複雑な動きの極地法を、そのまゝではなく、凡ゆる客観状態をきりはなして、唯テントを如何にして進めるか、如何にしてポーターを展開するかといふ点に焦点を置いた。

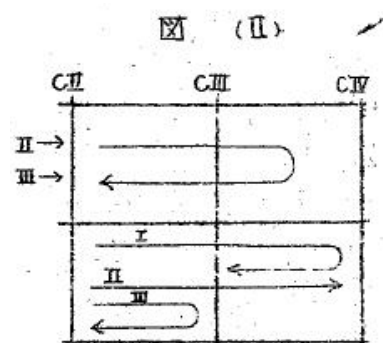
(一) 他登山隊の極地法行動表を見る事は、一寸うるさい。(文末各校行動表参照)しかし、色々な行動を目で見、読み且つ考へてみる時、図(I)に示した行動表の見本こそこれが極地法に於けるテント前進の最も基本的な行動である事が分る。即ち、一歩一歩と、偵察を行ひルートを開拓して一歩毎に前進するもので、図を説明すると、I隊は常に先へのルート偵察と、フィックスザイルの工作を行ひ、II隊はそれをサポートし、I隊を次から次へと前進せ



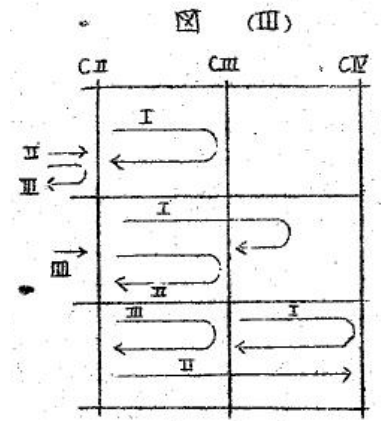
しめ、III隊、IV隊はその後を荷上げして行くのである。中大の明神尾根、明大の冬の北尾根等に、その見事な報告が見られるが、他の記録にも屡々見られる基礎的な物である。此処に於ては、I隊は、常に最小限度の必要物資と共に行動できる場合にのみ、一日の行動日も損失なくてスピーディに前進出来るのであり、一

方ボッカは、それに歩調を合せて次から次へと行はれ、且つ I 隊が欲する物を、I 隊が欲する時に、I 隊のいる場所に荷上げが出来てゐなければならない。この事が円滑に進行するには、ボッカの要領が如何に計算に基いたものであるかを物語り、又何時如何なる時も、此の動的状態が連続風雪で何日も停止しても、その儘の状態で作各テントが持ちこたへ得る最低食糧（この最低といふ所にボッカ量の合理性、ひいては計画全体のスピードが関係してくる）が何時も備へられて居らねばならず、且つそれに十分な装備と種々の高度な技術が要求される事は、如何に周到な計画と準備が必要であるかを物語つてゐる。つまり I 隊は、ルート開拓者としてテント前進ポーラ展開の力であり、後のボッカは、すべて I 隊を支へてポーラ展開への基礎となるもので、お互いの歯車がぴったり合つて滑かに何回も回転して行く事により、幾つかのテントが進められて行くのである。

所が一方、べつな方面から見ると、ポーラ展開の全体を初めから終りまで先述の様なあり方、即ち連続の回転といふ言葉で現はされる——同一の動きの型が繰り返されて進められる——法で考へてゆくよりも、寧ろもっと重点的、集中的な展開法が考へられる。それは、最後の 2 ヶのテントを出す事は、荷物も少く可成容易であるから、例へば、天幕を四ヶ所に設けるとした時、CII を実際に ABC として具体化し、前半と後半に分つ物である。CII 迄は、ベースを前へ進めるといふ意味で、CII へのボッカに全員で当り、全荷、全メンバーが CII に揃ふ迄はテントを進めず、唯その先の偵察、ザイル工作のみを行ひ、CII にそれらの終結と同時に一気に CIII、CIV を設けて、アタック態勢を完了しようとするものである。これのよい例は、一九五二年十二月の日大の岳川より北穂へのポーラに認められる。即ち CI 迄は、全員ボッカに六日間を要して CI に集り、後一気に全員で CII、CIII を二日間で展開して態勢を整へた。此の最後の 2 ヶのテントの展開は、図 (I) より図 (II) 乃至図 (III) の様な方法で、或は日大がやった様に地形のよく分つてゐる場合は、全然偵察なしで行ふと（日大の行動表参照）そこで一日、又は二日と行動日を短縮する事が出来て、而も CII からの爆発的エネルギーの使用により一気に展開をやり、その勢で攻撃もやらうとするものである。



だから、前の考へ方と、後のそれは決して横に並ぶ様な対立的な物ではなくして重ねるべき性質の考へ方である。具体的な細い基礎的計画は、前の考へ方により飽く迄綿密に周到に進め（例へば図（I）、（II）、（III）を適当に組合し）その運営に当っては所謂後者の ABC の考へ方による能率的な展開が望まれよう。



それからアタック隊の最前キャンプへの入り方であるが、これは図（III）乃至（II）の形式が多くの場合見られるもので——明大の冬の北尾根、中大の明神極地法、日大の岳川生活、日大の奥又→槍ポラー——この事は、先述の二つの考へ方を意識するとしないうに拘らず、ある意味でこの考への元にポラーが展開されてある事を物語るであらう。所が ABC の考へ方が、何処も、縦へのポラー展開上に於ける意味においては少い様に思へる。唯地形的にとか、又縦への攻撃以外の派生攻撃の為にのみ考へられてある様に思はれる。（早大の横尾尾根極地法に於ける天狗池コルの CII—此処から派生的に槍往復—、日大の奥又→槍に於ける前穂頂上の CII—此処から明神二峯往復—など）

又、ポラーの原則としては、アタック隊を出来る限り温存しておき、最前キャンプ完成と共にアタック隊がスーと後から出て来て、そのキャンプに入らうとする考へは、実際問題として殆んど不可能であり（早大の横尾尾根ポラーに於て強く反省してある）又そこ迄考へる必要はないだらう。

又アタック隊が入る日に、次の行動日の攻撃の一部でも偵察を行ふておく事は、その攻撃を成功に導く大きな要素であり、且つ日数節約、スピーディといふ点で極めて有意義である、所が図（II）、（III）では、アタック隊は二ヶ手前のテントから最前キャンプに入るが、やはり一ヶ手前のテントから入り、サポート隊最前キャンプを建設せしめて、その間に偵察を行ひたいものである。こうなると再び他の行動全体から考へて行かねばならない問題である。

要するにポラー展開に於ける色々な考へ方、隊の動き方に於て、その源動力は一に「工作隊」の如何に依ってある。図示上の I 隊が工作隊に相当するのである。普通どの極地法登山に於ても、これに類するパーティは在るが、これを意識に上らせて工作隊と名付け、見事にポラー展開の推進力として工作隊のポラー



一に於ける意味を確立したのは一九五〇年十二月の明大北尾根極地法である。彼等の工作隊は、ぐいぐいとテントを進めて行き、寧ろボッカ隊の方をたちまちせしめ、同年三月に早大が北尾根ポローラーで前穂頂上にテントを出せなかったのを厳冬季、見事にその頂上に CIV を設けたのであった。だから工作隊は、アタック隊と共に極地法登山の核心をなすものであり、それを、意識するのとしらないのとは極地法展開上大いに意味があるだろう。

私達は、今冬上高地を B.H とし天狗コルに CI、奥穂頂上に CII、北穂頂上に CIII を設け槍往復を行った。この極地法に於て特にそのスピードといふ点に主眼点を置いた。即ち殆んど常識化してある岳沢の B.C を設けずに天狗のコルの CI を ABC として、一五名で CI CII CIII 用全荷を一気に二日間で天狗コルに上げ、稜線上メンバー八名が入り、此処に CI に全メンバー、全荷が集結したのであった。勿論残部の者は、ボッカのみで下山した訳だ。その連続二日間の中に、既にロバの耳迄ザイル工作が完成していたのである。B.C を設けなかった事、ボッカのみのメンバーを集めた事は、かくも CI (ABC) をスピーディに完成せしめた要因であり、又一面阪大の特色を生かした点でもあった。CI に集結した状態で二日間連続して停滞せしめられた。更に CII、CIII へは二日間で態勢をととのへる予定の所、小さい不都合事と、急病人が出た事で、その下山の為人手をとられたが、それでも連続晴天三日間を与へられて、その期間内に CIV を一気に設けて態勢を整へたのであった。これは、図 (I) (II) (III) の形式をその儘ではないが、適当に組み合し、其処へ ABC への終結後を一気に展開するといふ運営法を見事加味出来た姿と言へよう。

(二) ポローラー展開の主動力は、工作隊である事は、何度の述べた事だが、一方ボッカ作業はその基礎としてゆるがせに出来ない歯車の一方の輪である。此の事について、これのみ取り上げて今更述べる必要もないが、その中心点のみ簡単に取り上げよう。これは計算、荷造り、荷分け、荷上げとして現れる。この初めの三者計算、荷造り、荷分けは所謂“準備”として完璧の域迄努力すべきは勿論であるが、特に“荷分け”はボッカを確実に進め第一の基礎であらう。我々は今冬、荷分けの不鮮明さから一ヶ所ニガイ経験をなめたのだった。明瞭な荷分けなくして、とても山での正確なボッカは望めないのである。今一つはボッカは唯単に荷を上げる事ではなくして、必要な物を荷上げするといふ事である。つまり荷上げの順番が命であって、明日必要な物が明後日必要な荷よりおくれたりしては何も

ならない。「明日上では何が必要だから、今日荷上げするには、何を第一に、何を第二に・・・」と、常に適確な荷上げの順位をつけて、正確にボッカを行う為には、是非共、全計画に知熟した責任者が絶対に必要である。多くの場合チーフリーダーが後部に在、兼ねてこの任にあたっている。

(三) 我々が極地法登山に於て、今回スピーディーな展開といふ問題を主眼に取扱ったが、今一つ考へねばならない事は、そのテント間隔とアタックの問題であらう。テント間隔を精一杯に広くしたアタックも、逃げる様な即ち攻撃した日にCI迄撤収する様なものではなくして寧ろラッシュタクティックの様なアタックを組む時、同一の規模でより広範囲な行動を展開する事が出来よう。更にアタックがその儘縦走に移れば、益々面白くなって来る。要するに、極地法に於けるスピードも、単なる時間の短縮ではなくして“行動範囲をより拡大する”といふ点に意味があるのである。

穂高に於ける極地法登山を調べたが、見落しもあるだらうが大体次の様なものである。

○一九三七年一二月（慶応） 西穂→奥穂

善六郎沢上部にB.Cを設け、CIIIを天狗岩頂上に設けて奥穂往復。

○一九四二年三月（早大） 横尾尾根→奥穂

B.Cを横尾岩小舎、CIVを北穂直下に設け奥穂往復及び天狗池コルのCIIより槍往復。

○一九四七年三月（早大） 北尾根

北尾根末端より五、六コルにCIIIを設けて奥穂アタック。

○一九四七年一二月（明大） 豊岩尾根→奥穂

○一九五〇年三月（早大） 北尾根末端より北穂

B.Cを横尾岩小舎、北尾根末端より取付き、CIVを三、四のコルに設けて北穂アタック。

○一九五〇年一二月（中大） 明神主稜→奥穂

岳沢下部にB.Cを設け、CIVを前穂頂上に設けて奥穂往復。

○一九五〇年一二月（明大） 北尾根より奥穂

慶応尾根コルにB.Cを設け、前穂頂上にCIVを設けて奥穂。

○一九五〇年一二月（日大） 北鎌尾根→北穂

天上沢上部にB.C、CIIIを南岳に設けて北穂アタック。

○一九五一年三月（早大） 天狗コル→北穂滝谷

岳沢上部に B.C、CIIIを涸沢槍直下に設けて滝谷アタック。

○一九五一年一二月（日大） 奥又白→槍

奥又の池 C I、前穂に CIIを設け、前穂東壁完登後、奥穂 CIII、北穂 CIVを設けて槍往復。

○一九五二年一二月（日大） 岳沢生活

B.Cを岳沢に設け、間岳に上りロバの耳奥穂側に CIIIを設けて北穂往復。

○一九五二年一二月（慶大） 北尾根

尚、参考として日大(2)、早大、明大、中大各校の極地法行動表を掲載した。



北尾根 → 北穂

1950.3 早大

横尾若小舎  
BC

屏風ノ頭  
CI

峯下  
CII

4.5JL  
CIII

3.4JL  
CIV

北穂

日	天候	BC	CI	CII	CIII	CIV	備考
2	晴	14					CI 債
3	"	4 6	II III				
4	"	15					
5	"	12	III				CI 建
6	曇		II	III			CII マダ債
7	雨	停	停				II III 物干
8	曇	I, IV, V	II III				
9	"	I, IV, V	III				
10	晴		II III				CII 建
11	吹雪	V 停	I, III, IV 停	II 停			
12	"	"	"	"			
13	"	"	"	"			
14	凡雪		V I, IV	III II			
15	"		I, V	II, III	P.6		CII にボカ集 II III IV
16	晴凡		I, V III, IV	II	P.4		
17	晴		I, V, IV	II III			
18	曇雪		I IV, V	II, III			
19	凡雪			IV, V	I, II, III		
20	"			"	"		
21	"			"	"		
22	"			"	"	P.3	
23	晴			IV	I, II, III	2名	前木にCIVを 作る事にする
24	晴			V		P.2	CIV 建失敗
25	晴雪						CIV 6.00 前木 6.50 真木 8.55 小舎 9.50 北木 13.30
26	曇				I		
27	晴			V	IV	I, II, III	前木 真木 小舎
28	"						

明神主稜 → 奥穂

1950.12 中大

西木部沢木場  
B.C

C.I

最南峰直下  
C.II

RIPZIL  
C.III

C.IV

奥木

日	西木部沢木場 (B.C)	最南峰直下 (C.I, C.II)	RIPZIL (C.III)	奥木 (C.IV)	備考
XII 16	→ II I III IV V				II ボンカ俵がけ
17	→ II ← I III IV V				
18	→ →				
19	全 ←				C.I 建 II 隊入る
20	→ II I III IV V				
21 吹雪	→ III IV ← I	→ II			最南峰迄5本fix (160m) I → C.I II III ボンカ
22 晴	→ III ← IV	→ II ← I			
23	← IV	→ I ← II	→ II RIPZIL		C.II (I, II 隊) II は C.I へ逆ボンカ
24	← IV	→ III	← I, II		C.III 用ボンカ (II)
25		→ III ← IV	→ II ← I		
26		← IV	← I, III	← II	
27		"	"	"	
28		← III → IV	← II ← I	→ I	
29		← III	← I ← II	→ I	奥木 頂上 11:30 出発不明
30	← III ← IV	← I, II			

北尾根 → 奥穂

1950.12 明大

KI尾根 P2 コル P.8 下  
BC CI

5,6 コル  
CII

3,4 コル上  
CIII

前木  
CIV

奥木

日	天候	BC	CI	CII	CIII	CIV	備考
XII 18	吹雪	3					
19	曇	7 5					5名 CIへ備 ボツカ (不能)
20	晴	5 6					
21	瓦雪	6 4	5	P.8			
22	晴風	7	3 1	3 P.5			CI隊4名 P.6まで ボツカ fix. 200m
23	晴	5 2	5 2				CIIの3名は P.5の ガイル工作
24	瓦雪	5	5 2	3	P.4		
25	晴 (風)	5	5 2	2	5		P.4迄ガイル工作
26	瓦雪	5	停	停			BC 隊ボツカ
27	"	3 2	"	"	P.3		
28	晴	不明					
29	"						
30	瓦雪	5		停2	停4	停3	
31	"						CII 隊 連絡
I 1	"						
2	晴						CIV 7977 CIII, CIV ガイル撤収 CI 隊は CIII 撤
3	瓦雪						

# 岳川生活

1952. 12 日大

上高地 B.H      岳川 B.C      峠ノ岳 C.I      天狗ノ丸 C.II      西ノ耳 C.III      北本

日	天候	上高地	岳川	峠ノ岳	天狗ノ丸	西ノ耳	北本
12	晴		11				B.C 建設 (カマボコ)
13	晴		7	2	偵察		
14	晴		7	4			
15	曇雨		8	4	新入トレニ×↑ 西木ノ沢 → 西木ノ岳 天狗ノ沢 → 天狗ノ岩		
16	雪		12				B.C 撤収 全員 C.I へ入る
17	曇 晴		12				
18	晴		9	1	2		
19	晴 曇		2	5	2	3	
20	降雪			停	停	2	
21	。			。	。	停	
22	。			。	。	。	
23	。		5	2	2	2	C.III (6, 40) 北本 (10, 30) C.III (14, 20)
24	ガス			7	8	2	C.III, II 撤収
25	降雪		8	4			C.I 一部撤収 B.C 再建設
26	晴		4	4	西木		西木登頂后 C.I 撤収

第一次の計画終了し 翌27日より第二次の計画に入る。

# 冬山報告

## 冬の穂高

山本光二

昭和二十八年の春、数年来の夢であった後立山縦走に成功した我々は、積雪期に於ける次の目標を何処にしようかということに就いて少なからず迷っていた。唯皆が理解していたのは、春の稜線上での行動がさしたる支障もなく行われ得る様になった今、次は冬の国境稜線こそ会の進むべき当然の方向だということと、我々の後立山での諸々の成果は一度は他の場所で確かめられなければならないということであった。極端に云えば後立を除いた冬の稜線であれば何処でもよいといった気持を持っている者さえいた。しかしながら我々の休暇は限られており、天候の悪い剣や、アプローチの長い北岳で長期間稜線で生活し得るとは思われなかった。結局、遠山川の軌道を利用できる南アルプスの南部と穂高とが対象として残り、種々議論が盡されたが、何れとも決しかねた。冬の目標が未決定の儘に、夏山合宿は剣で行われたが、その頃から未だ見ぬ冬の穂高の国境稜線が次第に強い魅力をもって仲間の中に意識され始め、先輩の中にも、今こそ幾多の山岳団体の記録のある穂高で、阪大山岳会の実力を試す絶好の機会だと云われた人もあって、秋山を前にして、冬の目標は穂高にすべく決定をみた。

ルートは最初西穂から北穂が考えられたが、西穂から奥穂を計画しているところが三校もある様子なので、天狗のコルから槍往復に決められた。但し天狗のコルは天幕を設置し得る場所が少いので、此処に他のパーティの天幕が二つ以上ある場合には、明神最南峰より北穂を第二計画とすることにし、その決定は専ら先発隊の偵察結果によることとした。

先にも述べた如く、種々の学部より成る我々のパーティは時間的に非常な制限を受けており、我々の行動可能の期間は正月の前後に約二週間あるのみであった。この様な状況の下にあって、天狗のコルより槍往復という、かなりの長大な計画を実行するには、ある種のスピードを必要とした。それは、最先端キャンプを出発した刹那に、ポーラー・システムから完全なラッシュ・タクティックに移行し得る程大きな攻撃力をもったアタック隊を、如何にして最もスピーディに北穂頂



上まで前進せしめるかという課題との対決を意味した。このため我々は、一方でナイロンテントの購入や八ミリの細引きの使用による装備の軽量化をはかると共に、他方先発隊のデポと、サポート隊の活用によって岳沢には何ら中継キャンプを設けず、天狗のコルまでの荷上げを全員一日十三時間の行動という一種のラッシュにより一挙に解決せんとした。かくしてポラーシステムでもなくラッシュ・タクティックばかりとも云えない、一種奇妙な計画は次第にその形をととのえて来た。

最後に問題となるのは、現役の中で穂高に経験のある者が極めて僅かしかいないことで、アタック隊の川島、尾藤ですら北穂から槍の間は夏も通ったことがない程であり、一時は夏山を穂高にするべきだったと後悔した位であった。しかし他面、我々の大部分にとって未知の場所、しかも冬の稜線ということは大きな魅力でもあった。そして、それだけに文献は一層の熱心さで輪読され、秋の三度にわたる偵察の後、大体ルートに就いての成算を得たときは実に嬉しく期待で胸がふくらんだ。

## ○ メンバー

### CⅢ隊

アタック 川島 勇 (CL)、尾藤昭二 (SL)

サポート 木村 裕

### CⅡ隊

山本光二 (L・記録)、土屋 直

### CⅠ隊

東 雍 (L)、穴戸 元 (食糧)、空中 勝 (装備)

### サポート隊

住吉仙也、広橋 茂、抱 忠男、林 伸一、山本進一郎

## ○ 行動概況

十二月廿二日 先発隊山本、土屋、木村、抱大阪発

廿三日 (曇時々雪) 先発隊中の湯泊。

廿四日 (晴) 帝国ホテル木村氏宅に入り装備の点検。釜トンネルの上からスキーをはいた。

廿五日（高曇） 先発隊はホテルで天狗のコルには現在、学習院パーティのみしか天幕を設けていないことを聞き、計画は第一案に決定、以後はボッカに専念することにし、天狗沢出合より少し上標高二二〇〇米附近に荷物をデポする。（デポⅠ）本隊の川島、尾藤、住吉、東、穴戸、広橋、空中、林、山本（進）大阪出発。

廿六日（風雪） 先発隊は前日と同じ場所まで荷上げ。本隊は沢渡泊。

廿七日（快晴） 先発隊は今日こそ天狗のコルに達しようと思ったが、前日の降雪のため天狗沢のラッセルは胸迄もあり、遂に午後四時あきらめて、天狗沢が左俣と分れてから少し登った左側の尾根の末端附近にデポする。（デポⅡ）本隊は帝国ホテルに入る。

廿八日（小雪） 土屋、木村をテントの整備と飯焚に残し、他は全員で天狗のコルに荷上げし、CI設営後川島、住吉を残してホテルに下る。この日尾藤、東はラッセルのため一同より一時間早く午前五時先行したが、デポⅡ附近で学習院パーティが下山されるのに遭ひラッセルは大いに助かった。尚、デポⅡに於けるちょっとした手違いのため、本来のCI用テントをデポに残してしまったので、CIには止むなくCⅢ用のナイロンテントを張ったが、このことは後に計画を実質的に一日遅らせるに至った痛恨の失着であった。

廿九日（高曇） 川島、住吉はロバの耳までのザイル・フィックスを行い、他は林、抱を除き全員残余荷物の一切と共に再び天狗のコルに至り、四人用テント一張を増設して、午後四時CⅢ・CⅡ・CIの各隊はCIに入り、住吉、広橋、山本（進）は夕闇迫る天狗沢を下って行った。

卅日（風雪） 停滞

卅一日（風雪） 停滞、午後五時頃気温零下廿八度。

昭和廿九年一月一日（快晴） 凄い風の音にだまされて天候判断を誤り出発が遅れる。八時半、川島、山本は先行し午後三時奥穂小屋までのフィックスを完了する。尾藤、穴戸、空中はテントの張替及荷物の整理を行い、東、土屋、木村は奥穂頂上のCⅡ建設予定地にボッカしたが、ボッカ隊がスコップを上げるのを忘れたため、CⅡ用のブロックを予め切っておくことができなくなった。第二の失着であり後にCⅡがつぶされる原因はこの辺にもひそんでいた。この日は一日中、春と間違ふ様な実にのどかな快晴であった。

二日（晴后風雪） 七時頃朝食中に東が右腹の痛みを訴える。盲腸炎らしいのでペニシリンを注射し、クロロマイセチンを服用させ、宍戸、空中をつけて下山せしめる。ところが全く幸運なことに、この時太田敬氏と共に徳永、大島両先輩が天狗沢を登って来られ、外科医たる徳永先輩は天狗沢の途中で直ちに東を診察された結果、東は正しく盲腸炎であることが判明した。一同少なからずがっかりしたが、東のことはOBで引受けようという大島先輩の確言を有難く聞き安心して十時半出発する。奥穂に着き（十二時）尾藤、木村はフィックスのため涸沢槍の下りまで行き（午後三時）残る三人でCIIを建設する。CII設営場所は始め奥穂頂上の前穂側の予定であったが、岳川側よりの風が強い上に雪量が少なくてブロックが切れないので、テントが老朽していることも考えて奥穂小屋側へ少し下った処、登高九号にある慶応の方がかつて高所露營研究のためにテントを張られたという位置に変更した。吹雪が烈しくテント設営はかなり困難であったが、午後五時には完成し、フィックスに行った二人も帰り漸く落ち着くことができた。

尚、東とこれに同行した徳永先輩及び宍戸、空中はホテルに泊り、太田氏と大島先輩は奥穂まで我々と同行された後、涸沢へ下られた。

三日（快晴） CIIは設営位置が悪く起きて見ると奥の三人は動けない程埋められていた。掘出しや荷物の整理に手間どり十時出発する。CIIIへのボッカは一人約四貫、午後三時半北穂頂上に着く。山本、土屋は直ちに引返し、六時CIIに帰着、CIIIは北穂北峯頂上に快的に設営された。遂に攻撃態勢はととのった訳である。

一方、東には徳永先輩が同行して沢渡へ下り、大島先輩、宍戸、空中は中の湯附近までこれに同行し上高地に泊る。

四日（風雪） CIII、CIIは停滞。宍戸、空中は大島先輩及び太田氏と共に天狗沢を登り、二日朝以来たゞんであったCIを再建設して太田、大島両氏と別れてこれに入る。

この頃よりCIIの生活条件は次第に悪化しつゝあった。設営場所が吹き溜りの底にあるためいくら除雪しても四方からさらさらと際限なく雪が滑り落ちてき、三十分足らずでもと通りになった。おまけにCIII建設后持ち帰ってCIIに置くはずの大シャベルをCIIで日没に迫られたためキャンプ完成前に帰途についたので持って帰れず、十能のような小シャベルでは除雪の能率はてんで

問題にはならなかった。さらにもっと悪いことにはラヂウスが三日朝以来調子悪く、よく見るとハンダが外れ其処からガソリンが吹き出していた。

五日（晴後快晴） CⅢ隊川島、尾藤は槍アタックに成功した。CⅢには食糧が四日分しかなかった。従って三日目にアタックをするということはその次の日には是が非でも撤収しなければならないことになり、斯様な冒険は許されないから、二日目のこの日晴天に恵まれたのは全く幸運であった。

CⅢ（六・二〇）－南岳（一一・〇〇）－肩の小屋（一二・四〇）－大槍登頂（二・〇〇）－南岳（五・〇〇）－横尾本谷北壁直下（七・〇〇）

（以下アタック隊川島の手記による）

「尾藤も私も北穂から槍迄の稜線を一度も歩いたことがなかったので明るくなるまで待ってCⅢを出発した。キレットへの下りは昨日の新雪がふわりと乗っていてコンディションはよくなかった。北穂小屋すぐ下のルンゼで突然板状雪崩が発生し私の足許からかなり大きな雪板が音もなく滑り落ちて行った。少し下ってからアンザイレン。信州側を絡み乍ら下降を続けた。北壁はどこにあるのだろうか。我々は文献によって北壁中のルンゼを下りれば横尾本谷に出られることを知っていた。どれがそのルンゼだろうか。突然絶壁の上に出た。眼下には広いカールが見え、対岸には南岳が聳えていた。そしてその遙か向うには、我々が望んで止まない大槍が穂先を覗かせていた。

目的のルンゼは一目で分った。針金を伝い、岩峯を巻いてルンゼ詰のコルに出ようとしたとき、尾藤が軽い叫び声を上げた。ピッケルのシャフトが折れたのである。この儘アタックを続行すべきか、引返すべきかに暫く迷った。引返せばもはや再びアタックするだけの余力は我々にはなかった。

「行こう」

彼の決然たる声で、我々は又前進を始めた。ルンゼを真一文字に駆け下り、カールの底でザイルを解く。昨日の新雪で膝を没するラッセルである。ワカン  
はCⅠから先には全然上げてなかった。それで南岳から一つ手前のピークへのリッチを直登し、こゝから稜線を辿った。南岳の登りも恐ろしく悪い処である。南岳から中岳、大喰岳と処々ラッセルし乍らも快適に突走り、昼過ぎ槍岳の肩の小屋に着いた。大槍登頂は午後二時であった。

少し前から天候は悪化し始めていたので、大急ぎで帰途についたが、大喰岳のかゝる頃から風雪になった。中岳の下りでは下り口が分らず少し迷った。南

岳手前のピーク辺りより風雪は烈しくなり、ルートを失うことが屢々で、全く磁石とカンだけが頼りであった。漸く南岳肩のコルに着いたときは既に夕闇が迫っていた。ルンゼを真一文字に下ってカールの底に出た。腰迄のラッセルである。日は全く暮れ風雪は一向に衰えない。岩陰で小憩の後電灯を頼りにCIII迄強行しようと北壁のルンゼに向ったが、往きにはなかった岩場にぶつかって前進困難となった。諦めて少し引返し、岩を背にツェルトを被ってビヴァクする。小型のプリムスがあったので、まづまづ快的なビヴァクであった。(手記中断)

アタック隊が苦斗を続けているとき、CIIでは、はるかに陰気な生活が始まっていた。吹き溜りの底に埋もれて昼でもローソクをともしねばならない程暗いのは前日と変わらないがラヂウスの調子はいよいよ悪くなり、使用中はまるでピストンの如くポンプを押さねばならず、ケロジンの不完全燃焼による悪息はテントに充満した。カバーのない土屋のシュラフはバリバリ凍り、腹の冷えた彼は腹痛を訴え出した。無理もない。CIIではこの日から湯も飲めないようになっていた。昼過ぎCIの穴戸、空中が連絡に来たが、CIIには彼等の渴きを癒すだけの水すらなかった。

六日(風雪後晴) アタック隊CIIIに帰着する。(アタック隊川島の手記続き)

「完全に明るくなるのを待って八時ツェルトから外に出る。未だ雪は止まないが地形の判断は出来た。我々は北壁の真下、左寄りにビヴァクしていた。昨夜の岩場は北壁左端の岩稜だったわけである。腹迄のラッセルに苦しみつつ往路のルンゼを登る。稜線に出た途端に物凄い風雪に迎えられた。漸くの思いでCIIIに振り返ったときには、二人共指先を軽い凍傷にやられていた。(十一時)  
(手記終り)

CIIでは夜が明けると、薄明りの中に殆んど身動きも出来ないているお互いの姿を見出した。ローソクをつけ、カチカチのフランスパンをかじりながら相談する。昨日の晴天にアタックが行われたことは間違いない。その成否はとにかく、CIIIの残余食糧より考えて次の晴天には撤収が行われるのは確実である。だからなんとかこのテントであと二日程生活し得ないだろうかと思ひめぐらした。ラヂウスは殆ど使用不能になっている。その上ラヂウスの故障のため、意外に多くのローソク、マッチを費したので、ローソクは一本、マッチは十五本足らずになっていることを知った。こゝに至り漸く奥穂小屋への避難を真剣

に考え始めた。今CIIを抛棄することは、ポーラーシステムの完全な破綻を意味する。しかしそれは安全性の限界を超えて行動する理由になるだろうか。二時間近くも考えたが、遂にCII抛棄を決定し、シュラフ、食糧等の必要品を持って物凄い風雪の中を奥穂小屋に入った。

C I 隊に停滞。

#### 七日（風雪）

CII、C I 隊共に停滞。CIII隊は我々の計画はぎりぎりのものでCIIIには食糧の余裕が余すところ一日分しかないことを考え、昼頃薄日が差して来たのに力を得て、独力でCIIIの撤収を行った。（十三時半出発）気温低く何もかもバリバリに凍っていて、かなりの重荷であった。涸沢槍にかゝる頃より予想に反して再び風雪は烈しくなり、涸沢岳の登りではフィックスが深く雪に埋まり、ピッケルで掘り出すのに半時間もかゝった。顔面は吹きつける雪に凍りつき、思考力も凍結したかの様に、前へ進むことだけが頭にあった。最後のフィックス日本は抛棄し、漸く涸沢岳に立つことが出来た。ここで電灯を出し、何度もルートを誤りつゝ辛うじて穂高小屋に辿り着いた。（午後六時半）そして、此处で彼らは始めてCIIの破綻を知ったのである。それでも人数が五人に増すと少し陽気になった。木村だけは、指先をかなり強い凍傷にやられ、「痛い痛い」と云いながら指を湯につけていた。

八日（快晴） 快晴だが風は強く気温も低い。CIII隊員はCIII撤収を今日にすべきだったと後悔したが、昨日のアルバイトのおかげで今日は一部上高地まで撤収しようということにする。十時、川島、山本は前日残して来た涸沢岳のフィックスを取りに行く。その間に、残る三名は、折から登って来たC I 隊の二名と共に雪に埋もれたCIIを撤収し、午後一時半C I に向って出発した。皆荷が重いので、悪場ではかなり緊張させられた。川島、山本は最後尾からフィックスを撤収しながら来たので知らなかったが、ジャン・ダルムのトラヴァースで土屋が頭に落石を受け危く滑落しそうになるという全くぞっとする様な場面もあった。フィックスが細引き三米程とピトン一本を残して、他は完全に撤収されたのは四時半、その頃、先頭はすでにC I に着いたが、C I 撤収に時間が遅すぎるので、土屋、宍戸、木村は上高地に下り、他はC I に泊った。一同やれやれといった気持だった。

九日（曇） 天気は悪いが、いやに暖い。荷物を大きく四つに分け、各人がそれを引きずったり転がしたりしながら天狗沢を下る。岳沢には上高地から三人が迎えに来ていた。

十日（雨） 装備の乾燥がすんだのは昼。春山の計画に必要なため全装備を七人が背負うと一人宛十二貫程にもなった。午後二時雨の中を上高地を出発。坂巻までと思ったが、中の湯に来たときは真暗であった。

中の湯に着くとすぐ湯に飛び込んだ。湯の中で歌をうたいながら今度の山行を回想した。今冬の計画は文字通りぎりぎりのもので、そのためか反省すると枚挙に暇のない程失敗があった。たしかに厳しさという点では過去に阪大山岳会が行った如何なる計画も及ばない程のものだったろう。それだけに不完全な面もあったが、これをとにかくやり終うせたのだ全く嬉しいことだった。こうして湯に入っている今でさえ、問題は山積している。第一明日は一人当たり十二貫の荷を沢渡まで下さなければならないし、卒業試験は迫っている。先輩は勿論、そこら中に借金がある。だがそれにも拘らず自分も含めて、皆によくやったと拍手でもしてやりたい様なほのぼのとした気持が湯の香と共にお互の間にたちこめていた。

—終—

## ザイル・フィックスに就いて

何度も述べた様に、今回はスピードある行動ということに特に力がそそがれた。しかしこれとて安全性の限界を超えることのできないのは云うまでもない。そこでザイル・フィックスは充分にし、しかもそれに要するザイルの重量により行動の敏活性を缺かしめないために八耗のザイルを思い切って用いた。唯強度の点より考え、トラヴァース以外の場所では十二耗のものを用了。従って全長三百メートルを超えるフィックスを行ったにもかゝらず、ザイルが重荷になったり、つかまっているザイルの強度が気に懸るという様なことはなかった。以下フィックス個所を羅列する。

ジャン・ダルムのトラヴァース（八耗、四十米）

ロバの耳の下降（十二耗、四十米）

ロバの耳のトラヴァース（八耗、四十米）

クラート・ツルムへの登り（八耗、三十米）

ロバの背（五耗を二重にし二十米）

奥穂から小屋への下降（八耗、四十米）

涸沢岳の下降（八耗、四十米、十二耗三十米）

涸沢槍の下降（十二耗、四十米）

北穂南峯の下降（五耗、二十米）

尚、比較的安全度の高いところでは補助的に五耗のものを、傾斜の緩い上下にはトラヴァースでなくとも八耗のものを使用したことを附言する。

## 食 糧

C I 建設までの食糧とその後の稜線上のものとははっきり区別した。前者は普通の平地食と何ら変わらないものであったが、後者はあらゆる点で軽量化、簡便化が計られた。

主食では米を一切廃し、フランスパン、揚げパン、食パン、即席モチの四種類を用いた。即席モチは初めての大量使用で、最初の中は喜ばれたが、時日が経つにつれて、醤油、キナ粉等の調味料を持ち合わせなかったので次第に倦きられ、結局のところはトーストパンが一番愛用された。これは市販のガス・トースターをラヂウスにのせて作るもので、今やこの小さな道具は我々にはなくてはならないものとなった。その他に興味あるのは、C III 隊の木村が上高地からこっそり米五合程を持って行ったが、これが C III で正に天下の美食となったことで、昨年春も感じたことだが我々の旨好には米とは殆んど離れ難くできているから、重量の点で問題にならぬ位の量を一種の食慾のための娯楽として携行するのも有利な方法であろう。

副食では、味噌、醤油を廃し、野菜を全体で約五百匁程度の乾燥ネギに限った。

斯様な食糧の軽量化は、一応成功はしたけれども、質的面では欠陥を露呈した。換言すれば我々の旨好とバランスが取れなかったのである。ことに副食の簡素化は調理可能の料理の種類を限定し、遂には主食に於ける食慾にまで影響を与えた。これは食糧ことに副食の計画がドロナワ式に行われた結果と考えられる。食糧計画の樹立にあたっては必ずパーティ内部に於ける各人の旨好に妥協点を見出しておかなければならないことは言をまたない。しかるに今回の計画は立案より実行に移すまでの間が短かったせいもあってこれが行われなかった。したがって山に運ばれた食糧は、食糧係が独善的に自己の旨好によって購って来たものばかりということになり、いやでもそれを食べなければならない様になってから不満の



声が挙る様になる。しかもこれは食糧係だけの責任ではない。どうも阪大山岳会には食糧に関しては「あなたまかせ」の悪癖がある様に思われてならない。昨年  
の後立山縦走の報告の末尾に食糧計画は我々の反省の焦点であるということが  
書かれた。ところが一年経った今、又もや同じ告白をせざるを得ないのはなんと  
なさけないことだろうか。諸兄の再考、再々考を希うや切なるものがある。

## 食糧総量

### a. 稜線用食糧

#### 主食

即席餅	三六箱（一箱五五〇瓦入）
食パン	四二斤
フランスパン	一四四ケ
フライパン	二〇四ケ
ビスケット	一貫一〇〇匁

#### 副食

乾ネギ	
肉（牛肉）	
マーガリン	六ポンド
チーズ	一・五ポンド
マーマレード	四ケ
スープ素	一五ケ
味噌	三五〇匁
カレー粉	二ケ
脱脂粉乳	六袋
コゝア	1/4ポンド
塩	四合
砂糖	八斤

### b. 上高地 B.H 用食糧

#### 主食

米	二斗八升
フライパン	一〇四ケ
ビスケット	七〇〇匁

#### 副食

玉ネギ	二貫
ジャガイモ	二貫
味噌	一貫
醬油	五合
イワシ缶詰	二ダース

てんぷら油	一缶
サケ缶	四
カレー	三
バター	二ポンド
其の他	

## テント別食糧

行動表より各テントの行動日の食糧を算出した。

C1	八四食
C2	二七食
C3	一八食

## あ と が き

今回の計画は大きく三段階に分つことが出来る。第一段階は天狗のコルにC Iを建設するまで、次は攻撃態勢完了まで、最後の段階はアタックと撤収である。第一段階は先発隊の行動が予定より手間どった他は、一応支障なく完了することが出来た。ところが、第一段階から第二段階に移ろうとしたとき、C I隊のリーダーたる東が盲腸炎を起し、第二段階の展開に必要な二名の隊員がその対策のため計画から除外され、計画自体大きな障害に行き当たった様に思った。ところが幸運にも先輩、しかも外科医を含めたメンバーが登ってこられ、二名を除いた五名の隊員は全く後顧のうれいなく、折から恵まれた二日続きの晴天を利用して第二段の攻撃態勢完了に力を集中することが出来た。かくして第二段階は成ったが、その成功の中にはC IIの建設位置が悪いという失敗の因子を含んでいた。そしてこれが、アタック隊が横尾谷のカール・ボーデンでビヴァクしている頃頭をもたげ始めていた。続くC IIの抛棄と、C III隊の天候を誤認しての撤収により、五名が奥穂小屋に入る事態に陥り、アタックの成功を別としてポラー・システムとしては致命的な破綻を見た。しかし、続く快晴で事故なく撤収を完了出来たのは幸いであった。

斯様に幾多の缺陷を露呈しながらも、とにかく、槍往復に成功し得たのは、隊員各自の登攀能力もさることながら、OB達の幸運な出現と、正月に続く例年のない好天気によるところが非常に大きいと思われる。このことは、我々の培い来た強い神経は応々にして粗雑な神経と誤解され勝ちであり、弱い神経を厭うことは、精緻な神経まで失わしめるのを示している様に考えられる。この点こそは会の今後にとって大いに反省すべきことであり、次の機会こそは、我々の持って

いる強い神経に悔いなき山行を求める精緻な精神を加え、より一層力強い缺点のない登山を行いたいものである。

### 行 動 表

	上高地	天狗ノ丸 CI	奥木 CII	北木 CIII	槍
12月 25日	曇	← 4			本隊大破発
26日	曇	← 4			
27日	晴	← 4			本隊上高地入
28日	小雪	← 7 ← 2	← 2		沢つぼみガイルフックス
29日	曇	← 6 ← 3 ← 2	← 2		CI 建 全員全荷 CI=集結
30日	風雪	停	← 8		
31日	風雪	停	← 8		
1日	晴		← 2 ← 3 ← 3		奥木小屋で ガイルフックス
2日	晴後 風雪	← 3 1名岩場登=73名 上高地=下ル	← 3	← 2	酒沢より下ルで ガイルフックス CII 建 5名入ル
3日	晴			← 3 ← 2	CIII 建 3名入ル
4日	風雪	← 2 ← 0B.他1名		← 2 停 ← 3 停	CI 再建 岩場本谷カールホーデン
5日	晴後 風雪		← 2 (連絡)	← 2	アタック隊 ビザアーフ
6日	風雪 後晴	← 2	← 2	← 2	アタック成功 CII テント抛棄
7日	風雪	← 2	← 3 ← 2		CIII 撤収
8日	快晴	← 2 ← 1	← 2 ← 1 ← 1		CII 撤収 2名酒沢迄 ガイル撤収
9日	曇	← 4 ← 3			CI 撤収



# 春山報告

## 春の黒部へ

尾藤 昭二

昨年春の後立山縦走の時、連日の稜線上生活の合間合間に眺めた内蔵助平や黒部に実際吸ひ込まれる様な力を感じてみたが、それが記憶といふ箱に入れられ、意識といふ俎に乗せられてみると、冬の穂高に迄足をのぼして再び後立に郷愁を感じつゝある私達を一言の文句もなしに、黒部へ——後立を越えて黒部へ——と引っぱって行った。勿論、黒部といへば、直ちに私達の脳裏に浮かぶあの岩小屋沢岳から西北に伸びる岩小屋沢岳支脈は、昨春私達が開いた新越尾根と共に、既に記憶といふ箱に深くやきつけられた内蔵助平と結び付いて、私達の進む方向に太い一本の黒線として、私達をひきつけて行った。其処にはなんのまざり気もなく直ちに今春は大沢小屋に入らう、そして新越尾根を登り岩小屋沢岳のあの尾根を下り、黒部へ近附こうと春山に向つたのであった。

所が計画、準備の不備の為、黒部の河原に立つ事も出来ず、僅かに木の間から遙か下方に黒部を眺めたに過ぎなかった。しかし、私達の今回の偵察の要点を詳細に報告し、その基盤の上に若干の考察をなして今後の指針への参考ともなればと思ひ、夏の黒部下廊下さへ知らない私が筆を持った次第である。

### ●偵察隊行動概況（春山合宿に関しては“山行記録”参照の事）

春山合宿は、参加者の都合により A、B の二パーティに分れ、A 隊は五名にて三月十六日から十日間、B 隊は七名で三月二八日より十日間の大沢合宿を行った。夫々の期間中、A 隊は岩小屋沢岳支脈の高度約二一〇〇米附近に A.C を出したが、準備不足から十分下れず。一方 B 隊は A 隊の偵察行の結果、当支脈下降をとり止め、中尾根の途中、高度約一八〇〇米余の処に A.C を出して新越沢を下降し、僅かにその末端から岩小屋沢岳支脈末端に到達したに過ぎなかった。

### ●中尾根新越沢報告

中尾根（仮称）は岩小屋沢岳南肩のピークから新越沢に向つて下り、当沢を右と左の二股に分けてある尾根を指してある。上から下ってゆくと、初めは何でも

ない尾根であるが、高度一八五〇米附近よりは急激に落ち込み、尾根通しは悪く、私達は図示した如き雪溪を一気に二股迄下ってしまった。私達はこの雪溪の始まる処に A.C を設けたのである。此の雪溪は平均四〇度傾斜が一気に連続し、且つ途中に小滝があり雪崩の危険性もあり、その上見通しが出来ない、全くシンドイ処である。私達はこの直上に A.C を置いた為、帰途、正味二時間余直登しなければならぬといふ事が、どんなにか前進を妨げたか知れない。所が一旦二股に下ると、其処は広々として、眞白の波の大きなうねりの上に樺の大木が一本二本とたくましく腰をすえてゐる全く快適の場所なのだ。此処まで下ると、宍戸が「尾藤さん、此処へテントを出せばよかったですね」と云ふ。一も二もなく、この快適さによふ気持は、何年か前の冬、冷沢で同志社パーティが遭難した大雪崩の記憶に跡かたもなく消えてしまふ——といふ様な辺りの地形なのだ。此処から一見した所では、鳴沢岳に上つてゐる右股は、岩小屋沢岳に到る左股より悪そうだ。

沢の広々としてゐるのはほんの僅かで、少し下ると川巾は狭められ、兩岸共雪崩のデブリの上をトラバースしなければならなくなる。而も所々沢の眞中に水が顔を出し始める。一方見上げる兩岸の斜面の雪は、うっすらとして殆んど落ち盡し、融けた様であるが、尚所々大きな塊として残つてゐるのが、今にも滑り落ちそうに春陽に輝いていた。そこからの雪どけの水は次第に嵩を増して、トラバースするデブリの雪と、斜面との間に容赦なく流れ込む。このトラバースは、傾斜が急で、而も雪がくさり、安定した足場は勿論、ピッケル、アイゼンも効目少く全くいやな所なのだ。バランスを保ち体を宙に浮かす様に。こうなると、あんなにほしかった沢の水にも手が出なくなる。かくして左岸を、右岸をと、I 曲点に達すると八米位の滝に出合った。此処は、アンザイレンして左岸を行き、II 曲点を過ぎてIII 曲点迄下ると、大タテガビが目前に現われ、愈々黒部も近い事と知る。此処から岩小屋沢支脈末端に上る眞直の二本の雪溪が並んで居り、これは主稜線からも眺められたが、新越沢から当支脈に登降し得る最下端の物であらふと思ふ。デブリは、累々として上部は雪層もうすく、急傾斜な地面と何のかゝはりもなく今にも割れて崩れそうだ。

III 曲点を過ぎると、次は今度は大きい二〇米位の滝に出た。その先は再び新越沢は右折して見えない。黒部別山を眼前に見乍ら黒部が見えないのを残念に思つて左岸を行きかけたが、状態が余りに不安定なので止むなく先述の雪溪を登り（直登一時間余）尾根に上つたのである。高度約一六〇〇米足らず。

此処で初めて黒部を望むことが出来た。

### ● 榛の木平附近と黒部別山沢落口附近を中心とした考察

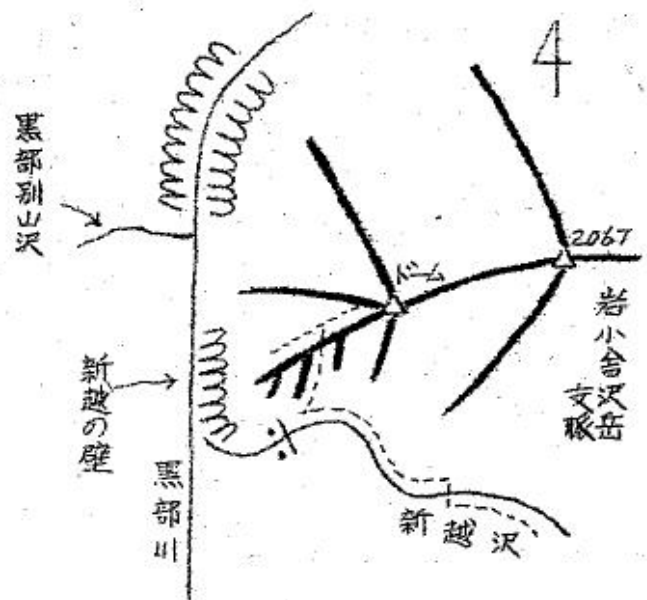
私達が木の間から望み得たのは、これら附近のみであった。

榛木平は、みるからに広々として木も点々と見られるいゝ所だ。冠氏が始めて黒部下廊下唯一の野営地として使用せられた。その榛木の疎林は、大タテガビンの斜面にはひ上ってゐる。所が其処より下流に来るに従い大タテガビンの斜面は傾斜を増し岩肌となる。それと共にその黒部の河岸は大きくデブリが横たはり、上には、今にも落ちそうな雪のブロックが点々掛ってゐる。その最も危く見えるのは、大タテガビンピークから黒部へ真直に落ちてゐる沢の所だらう。何しろ黒部別山大タテガビンの斜面の雪崩？雪のブロックの崩壊といふ奴は、何時とはなしにどんと落ちてゐるのだから。冠氏が春の黒部では特に“石なだれ”を注意されてゐるが（尤も冠氏の言はれる“春”とは五月～六月を指して居られる様だが）私も曲型的な雪崩ではなしに、雪の崩壊、それも急傾斜面に残った雪のブロックが、土砂と共に落ちるのには特別に注意しなければならないと思ふ。その意味から、当所の通過には可成の緊張が必要であらう。

それから黒部別山沢落口の少し上手に隣合して大きなスノーブリッジが見られた。恐らく通過可能と思はれる程度だ。又別山沢右股は、可成奥迄雪渓が続き、上部で右側（下から見て）の岩尾根に取付きさへ出来れば、登行可能と思はれる。

### ● 岩小屋沢岳支脈の黒部下降路についての考察

私達が立った岩小屋沢岳支脈末端から黒部へは、斜面の途中迄見通し得るも下部は見えない。私達は、上はドーム——一七〇〇米位の高度で、積雪期には其処だけ木がなくて真白のコブの様な高まり——迄行って見たが、それより北の黒部に面する斜面は、下る気にもならない所で、且此処からは見えないが、その下部は黒部別山側と共に絶壁をなして、黒部は全く廊下状となつてゐるそうである。それは、ドームから派生してゐる小支尾根の北に当ると思ふ。又我々の立ってゐるの尾根末端が黒部へ落ち込む所は



所謂“新越の壁”となつてゐるのだから、冠氏が秋黒部から岩小屋沢岳支脈に取り付かれ、又上から下降せられたのはその中間であらう。今一度その著書を開くと「渡渉点の少し上流の後立山側に、珍しく川近く迄下つてゐる灌木の茂った尾根に取付き、アンザイレンし、木をつかみ、全くはふ様にして直登三時間、やっと傾斜がゆるくなり唐檜の大木も現れ始め、間もなく黒部川に向つて尾根が二つに岐れた所に出た」（要約）とある。渡渉点とは、黒部別山沢落口より少し上手にあり下廊下唯一の所である。私の推測では、多分ドームから出てゐる小支尾根を直登してドームに達したのであらうと思ふ。私に見えた部分について言ふならば、灌木の生えた細い実に物凄い尾根である。

### ●黒部のスノーブリッジについて

文献的知識から言ふと、東谷落口、雲切谷落口、人見平には通過可能程度の大きなスノーブリッジが、一九三七年三九年の三月、二度共見られたのであったが、今春五四年は（関学の報告による）東谷、雲切谷何れも見られなかったそうである。東谷落口には、ガンドー尾根から落ちる雪が、ブリッジを形成するらしい。それから今春私達が見た先日の黒部別山沢落口より少し上手のスノーブリッジは、大正15年6月にも見て居られ、その事から相当おそく迄残る大きな物らしい。その他の場所については、全く分らないが、下廊下の春のスノーブリッジと言へば一応この三カ所は確実にあると認めてよいと思ふ。推測すれば、丸山谷落口、黒部別山北峯が黒部にはり出してゐる処所又ガンドー尾根の末端部分など相当可能性があるのではないかと思ふ。

### ●内蔵助沢についての推測

冠氏の言葉を借りると「丸山と大タテガビンとのU字峽は、落口迄雪に埋もれ、第残雪の下から激流は滝の如く本流に向つて落下してゐる」—大正15年6月—とある事から、私は漠然と沢通しに下から雪の上を行けるかも知れないと想像してゐたが、今春私達の新越沢の事から考へると恐らく下半分は沢通し通過不能であらうと思ふ。然しながら、内蔵助沢には滝がなく、唯急傾斜の河の流れである事から考へると、丁度滝のない雲切谷が下からずっと雪に埋もれて、雪の上の登降が出来たといふ今春（五四年）の関学の報告（三七年三月にも登行可能と偵察された）の如く、内蔵助沢も…案外行けるのかも知れない。何はとまれ夏道も十分研究して居く必要があらう。

### ●内蔵助平について

此処の雪崩については、唯、眞砂岳尾根及び内藏助谷からの平の中程にも達せぬ程度のが見られる位で、梯子谷乗越側も大タテガビン側も問題にならない様だ。まばらな疎林こそは、如何にも雪の山奥の平和郷に、親しみ深い魅力を点じてゐる。其処に於てさへ、かつて立教大の内藏助平生活では“丸山北峯より二五〇米突北下した所”にベースを設けられた慎重さに今更ながら尊敬の念を感じず。

### ●其他

望見した所、鳴沢岳から黒部に出てゐる尾根は、黒部直前迄十分下降出来る物である。又鳴沢は、滝連続で有名な鳴沢小沢と異り、その落口附近の黒部に面する岩壁も他より低くなつてゐるそうである。案外こういふ所に、ルートがあるのではないかしらと以前考へてゐたのであつたが、実は二年前に、鳴沢落口の右岸で黒部か后立山側に上り、一六〇〇米高度附近をトラバースして東谷落口に到る道が作られたといふ事を、最近而もこの春山後に知り、全く驚いた次第であつた。夏道が出来る程度であれば、可成容易に下れるだらうから、その場所さへ調べればたやすく鳴沢岳から黒部に到するであらう。私の不勉強な為、春山をもっと有意義にあらしめ得なかつた事を後悔する気持で一杯である。

最後に、夏の下廊下さへ知らない私が、春のその一部を見たのみで、厚顔にも種々の考察をなした訳で、だから単なる参考といへるものでしかない事を特に強調したい。

### ●装備について

私達はアイゼンとワカンを使用したのであるが、春の東谷生活や、内藏助生活された堀田氏らは、これらの春山では五尺のスキーが極めて有用である事を述べて居られる。

又高度が低いから雨に対する準備と、一日歩くと靴の中がぐずぐずになる程ぬれる事は、ぬれる事を知らない稜線上生活とは異つた不愉快な事であり、一応留意して居くべき事と思ふ。

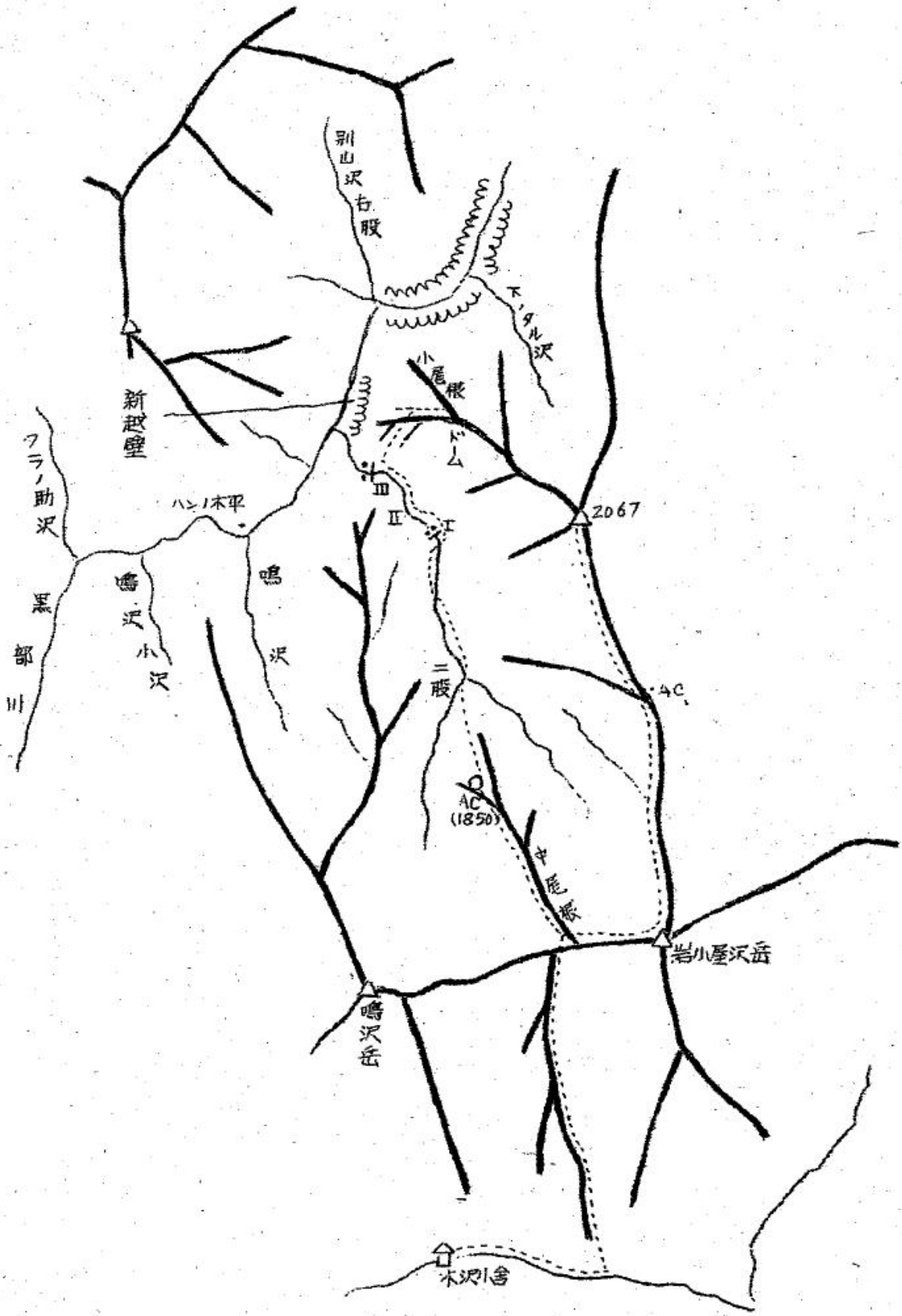
### ◇参考文献

冠松次郎著 「黒部」

立教大山岳部 部報 III号、IV号

関西学生山岳連盟報告 六号





# ≡装≡備≡報≡告≡ ナイロントtentについて

昨今、登山装備はビニロン、ナイロンの導入、経済情勢の好転、登山形式の進歩、加へるにヒマラヤ遠征等により急速に進歩し、二三の欠点はあるが軽量、強度、耐熱その他の面よりして積雪期高所tentとしてはナイロントtentが常識とされるに至った。我々の使用中のものはすべて戦前のものであり、一昨々年の北岳の経験、又今冬穂高のポーラーを計画するに当って従来のtentのみでは不可能のため又将来のためにもナイロントtentの必要にせまられ、昨年春製作決定、資金面は先輩、部員の御協力による事とした。設計は川島、製作は美津濃神保先輩にお願いし、十二月完成、早速冬山に使用、何分始めての事で色々考へねばならない点もあるが、一応好成績を得たので要点を報告する。

◇前進キャンプ用（根拠地用ではない）

○形（本号写真参照）

ウイムパー型

寸法	両端三角形	底辺	一、八〇米
		斜辺	一、七五米
	全長		一、七五米

○重量 軽量化に重点をおいた。

テント	四・三疋	一貫一五〇匁
内張	一・〇疋	二六〇匁
支柱	二・五疋	六七〇匁
計	七・八疋	二貫 八〇匁

○生地

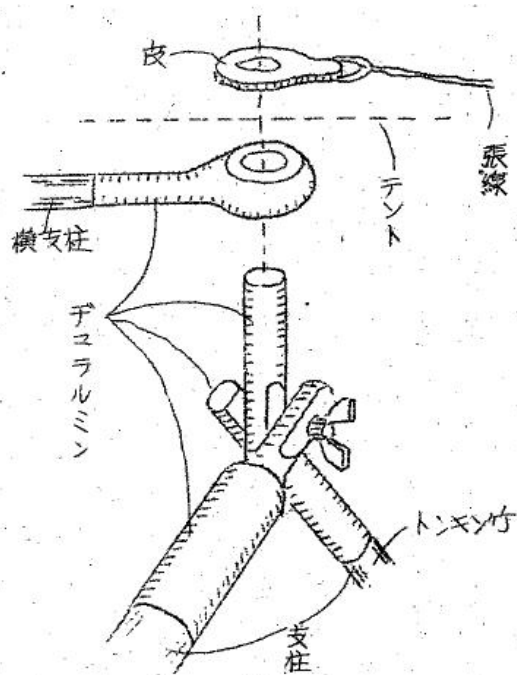
ギャバ織のナイロン製、マナスルのtentに比べるとはるかに厚手のものである。

神保先輩も言はれた事だがもっと薄手のものでも大丈夫だった様に思ふ。

○支柱

交叉点の固定は強度を弱める恐れがあった故に図の如くネヂでしめる事にした。即ち支柱の上端でデュラルミンの棒にしtentにつけたそれに合ふハトメの支柱を入れ上に出た棒に張線を固定した皮の板につけられたハトメをかぶせる様にした。これはtentを建設する時間を出来るだけ短くするためになさ

れた設計である。屋根に入れた横の支柱はテントの型をくずさないのに役立った。雪がある程度積っても之がフレームの如き役目をした。



○窓

之は始めは作るつもりはなかったが美津濃の工場との連絡の不備のため底にあけるはずの掃除穴をあけてしまったので神保先輩の御考慮によりアクリル酸樹脂の板をとりつけた窓とした。之は天狗のコルで天候を見るのに役立った

が、位置が少し下すぎたため雪に埋まるのですぐ役に立たなくなった。今後この様な窓はも少し小さく位置を高くする必要があらう。

○張線はことごとく五ミリのナイロンで作った。ナイロンはすべりが良く、張線にするとゆるみはしないかと思っただ、その様な事はなかった。

○入口 前進キャンプである点前室等は不用であると考え普通の巾着式と同じにした。ナイロンは全然凍りつかないので巾着は非常に快適で、今ある古いテントも巾着だけでもナイロンにしたらよいと思ふ。

○内張り

内張りを屋根の半分しかつけなかったのは明かに失敗であった。

最後に、資金の面でご協力下さった先輩諸兄並びに直接製作に当って下さった神保先輩に深く感謝致します。

寄附金会計報告

収入	医学部先輩	一一、五〇〇・〇〇
	理学部 "	五、九〇〇・〇〇
	工学部 "	一五、八〇〇・〇〇
	法経学部 "	二、〇〇〇・〇〇
	部員積立	九、〇〇〇・〇〇
	計	四四、二〇〇・〇〇
支出	ナイロンテント (支柱共)	二七、六八〇・〇〇
	ラヂウス 一台	二、八〇〇・〇〇

マット (エヤー) 2	三、〇〇〇・〇〇
ポ ー ル (二組)	三、〇〇〇・〇〇
カ ラ ビ ナ 2ケ	五〇〇・〇〇
ピ ト ン 三〇本	一、八〇〇・〇〇
フィックスザイル	二、七〇〇・〇〇
冬 山 援 助	一、〇〇〇・〇〇
交通通信費 (寄附ニ関シ)	一、七二〇・〇〇
計	四四、二〇〇・〇〇

以上

(尾 藤 昭 二)

# 山行記録

一九五三・六～一九五四・六

○道場（七月一二日）

川島

○夏山合宿（七月十九日～二十九日）

川島（L）、尾藤、山本（光）、東、土屋、宍戸、広橋、杵中、鷺沢、  
三枝、山本（進）、西川

十九日（雨）称名（一〇・〇〇）－彌陀ヶ原に幕営（一二・〇〇）

二十日（雨）追分小屋に入る。

二十一日（曇後雨）別山乗越へ荷上げ。

二十二日（雨）停滞

二十三日（雨）

二十四日（曇一時雨）追分小屋（八・三〇）－眞砂沢出合に B.C を設置（一三・  
三〇）

二十五日（快晴）

八ツ峯上半（川島（L）、宍戸、鷺沢、山本進）

八ツ峯六峯フェース（山本光二L、土屋、杵中、西川）

源次郎尾根（尾藤L、東、広橋、三枝）

二十六日（晴）

源次郎尾根（山本光二L、土屋、杵中、西川、宍戸、山本進）

源次郎一峯長次郎側フェース（川島、鷺沢）

八ツ峯上半（尾藤、三枝）

八ツ峯四峯フェースより上半（東、広橋）

二十七日（晴）B.C より三田平（尾藤、東、土屋、宍戸）、二股（川島、三枝、  
山本進、西川）、三ノ窓（山本光二、広橋、杵中、鷺沢）にそれぞれテント  
を移す。

二十八日（晴午後雨）

東大谷（尾藤L、東、土屋、宍戸）

三田平発（七・四五）－黒百合コル（八・三〇）－中の谷出合（一一・三〇）

－二股（一二・〇〇）－左股より早月尾根（一六・三〇）－劔岳頂上（一八・  
三〇）－テント（二一・〇〇）

劔岳主稜縦走（川島 L、三枝、山本進、西川）

二股（七・〇〇）－小窓（九・三〇～一〇・三〇）－小窓頭（一二・三〇～一三・三〇）－三ノ窓（一六・〇〇）－二股（一八・〇〇）

池谷右俣（山本光二、広橋）

三ノ窓 A.C（八・一〇）－劔尾根取付き点（九・〇〇）－二股（一〇・〇〇～一〇・三〇）－劔頂上（一七・三〇～一八・〇〇）－三ノ窓（二〇・一五）

劔尾根（杵中、鷺沢）

二十九日（晴夕立）全員二股に集合（一八・〇〇）

三十日 夏山合宿解散

○立山（七・一九～七・二二） 関本

雨のためパーティと連絡つかず立山、別山の縦走に終わった。

七月十九日（雨）称名の滝（一二・〇〇）－地獄谷（一八・一〇）

七月二十日（豪雨）地獄谷（一二・〇〇）－一ノ越（一三・〇〇）

七月二十一日（豪雨）一ノ越（八・三〇）－劔沢小屋（一一・三〇）

七月二十二日（豪雨後曇）劔沢（七・四〇）－御前（八・二〇）－地獄谷（九・二五）

－追分小屋（一一・〇〇）－称名滝（一二・四五）－帰阪

○劔穂高縦走（七月三十一日～八月五日）

東、広橋、宍戸、鷺沢、三枝、西川

七月三十一日（晴後曇夕立）三田平（六・〇〇）－別山乗越（六・四五～七・四五）

－一ノ越（一〇・三〇～一一・三〇）－ザラ峠（一四・〇〇）－五色（一五・〇〇）

八月一日（ガス時々雨）五色（六・〇〇）－スゴ頭（九・二〇～九・四〇）－スゴ

小屋（一一・〇〇～一一・二〇）－薬師（一五・〇〇）－薬師平（一六・〇〇）

八月二日（晴後曇夕立）薬師平（六・三〇）－太郎小屋跡（七・三〇）－上ノ岳

小屋跡（八・三〇）－黒部五郎岳（一二・〇〇～一三・〇〇）－黒部五郎部屋跡（一四・二〇）－三俣蓮華岳（一六・〇〇）－双六池（一五・〇〇）

八月三日（晴後曇）双六池（九・〇〇）－槍の肩（一二・三〇）－大槍往復－中岳（一五・〇〇）

八月四日（曇夕立）中岳（六・〇〇）－大切戸（八・〇〇）－北穂高（九・四五）

－穂高小舎（一一・四〇～一二・二〇）－横尾小舎（一五・三〇）－徳沢（一七・〇〇）

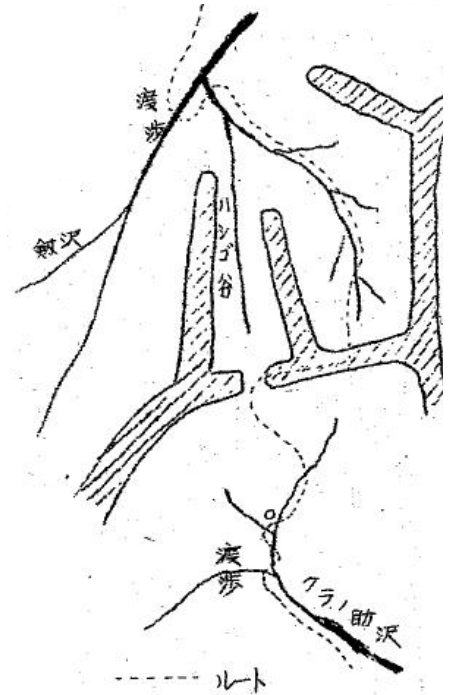
八月五日（曇）徳沢（八・〇〇）－徳本峠（一一・三〇）－イワナ止（一二・〇〇  
～一二・三〇）－島々（一七・〇〇）

○黒部及西鎌縦走（七月三十一日～八月八日）

川島L、土屋、李中

七月三十一日（晴後雨）二股（八・三〇）－梯子谷出合（九・三〇～一〇・〇〇）  
－黒部別山稜線（一三・三〇）－梯子谷乗越（一五・三〇）－内蔵助平（一七  
・〇〇）

剣沢を渡渉、右岸に沿って少し下り梯子谷出合に出る。梯子谷は左股を登り切ってブッシュの稜線を梯子谷乗越へ向って下る。乗越から内蔵助平へは急斜面のブッシュの中に踏跡が落ち込んでいて、これを下って行くと三十分足らずで水の涸れた谷に出た。やがて谷は広くなり歩き易い道となる。キャンプは右から流れの入っている所にする。



八月一日（曇午後雨）内蔵助平（一三・三〇）－  
二股（一四・〇〇）－黒部本流（一七・〇〇）

午前中は下流へ偵察に出かける。二股までは水量も少ないが本流になると水量大で明るい。周囲に白樺をまじへた一面の森林帯である。背は高くないから鬱蒼という感じはしないが、千古斧鉞を知らぬこの明るい森は青く澄んだ水と相俟って西欧風な感じをよく出していた。二股より十米上手で本流を渡渉右岸に出る。右岸を少し下り踏み跡というよりは道に近いものが続いているのを確かめて帰る。

午後キャンプを出発して黒部川に向う。内蔵助沢は右岸のブッシュの中を高く捲いて急坂を下って行った。出合には左岸に渡る丸木橋と軽量運搬用のロープウェイがある。対岸は五六十米の大絶壁で赤沢の出合が見られる。

八月二日（曇雨）キャンプ（八・三〇）－榛木平（九・三〇）－キャンプ（一三・三〇～一四・〇〇）－御前谷出合（一五・〇〇）－御山谷出合（一六・一〇）－キャンプ（一七・〇〇）

リュックをつめてから下の廊下へ偵察に出る。はんの木平迄は林の中の平坦な道であり、はんの木平には人夫の小舎があり対岸へ測量用の貧弱な釣橋

があった。更に下には所々新しい道が古い道を連結  
して、大岩壁の途中まで、道もつけられていた。  
そこから引き返す。

午後は上流に向かう。御山谷小舎で少憩の後吊橋  
を渡って右岸出、川が大きく弯曲している所でキャ  
ンプする。

八月三日(晴) 出発(八・三〇) - 平小舎(九・三〇~一  
二・三〇) - 木挽沢出合(一四・三〇)

中谷の出合で吊橋を渡って左岸にうつるとすぐ平  
の小舎である。

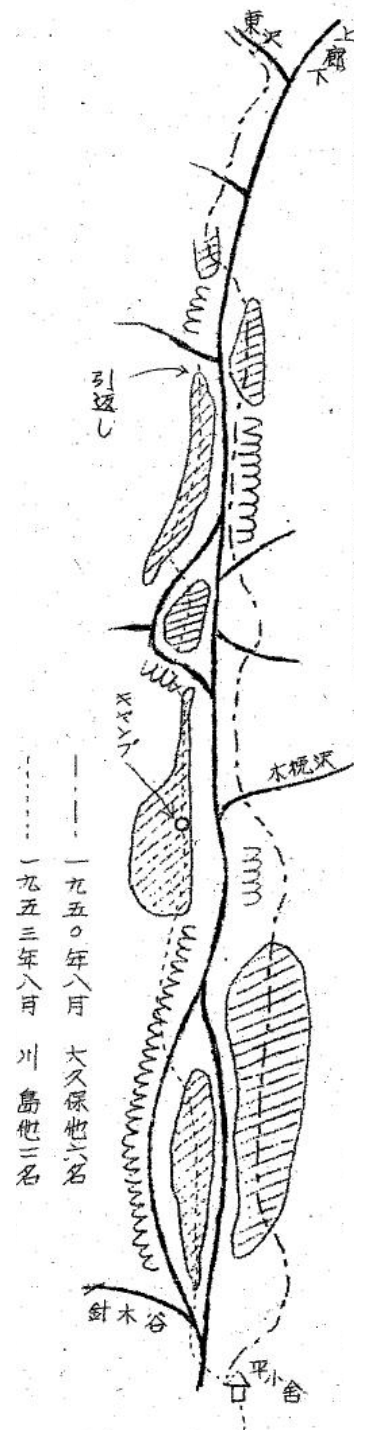
平よりは右岸沿に行く。針木谷を渡って中州にあ  
がり、之を少し行ってから右岩のガレ場を十米程登  
るとブッシュの中に入った。半時間ブッシュ漕ぎの  
後急斜面を懸垂で下って再び地上に立つ。広い砂地  
を三十分ほど行くと木挽沢出合である。こゝにテン  
トを張って更に上流を一人で偵察に出かけたが、左  
から大きな支流の入っている所で行き詰り、引き返  
す。

八月四日(晴) 三人で偵察に出る。昨日の行詰った所ま  
で行き、ザイルを使って対岸の砂地に渡渉しようと  
したが、腰まである激しい流に押流されすぐ引返し  
た。右岸の高捲きルートでの偵察もしたが、結局東沢を  
あきらめて、半日をイワナ釣りに費やす。

八月五日(曇夕立) 木挽沢出合(七・一〇) - 平(八・二〇~九・〇〇) - 南沢出  
合(一〇・〇〇) - 南沢乗越(一五・〇〇) - 南沢岳北峯(一六・〇〇)

東沢遡行をあきらめて南沢より槍に向うことにした。

八月六日(曇後雨) 南沢岳北峯(六・三〇) - 烏帽子岳(七・二〇~九・〇〇) -  
烏帽子小舎(九・三〇~一〇・〇〇) - 三岳(一一・一五) - 野口五郎岳(一三  
・〇〇~一三・三〇) - 東沢乗越(一五・〇〇~一五・三〇) - 水晶小舎跡(一  
六・一〇) - 鷲羽岳(一七・四〇) - 三股蓮華小舎(一八・一〇)





八月七日（雨）三股蓮華（一一・三〇）－双六小舎（一三・一五）－槍肩ノ小舎（一七・〇〇～一八・〇〇）－二ノ俣（二〇・〇〇）

八月八日（晴）二ノ俣（九・〇〇）－徳沢（一一・三〇～一三・〇〇）－白沢出合（一三・四五～一四・〇〇）－徳本峠（一五・四五～一六・〇〇）－イワナ留（一七・三〇）－島々（二一・三〇）→帰阪

○奥又白（八月八日～八月十六日）

山本光二、関本、田島 OB

八月八日 大阪発

八月九日（晴）上高地（一七・〇〇～一八・〇〇）－徳沢キャンプサイド（二〇・〇〇）

八月十日（晴）キャンプサイド（一〇・〇〇）－松高ルンゼ入口（一三・〇〇）－昼食（一四・三〇～一五・〇〇）－奥又白池（一六・〇〇）

八月十一日（曇後雨）出発（一〇・〇〇）－本谷雪溪取付（一〇・三〇～一一・二〇）－四、五峯コル（一二・一五～一三・〇〇）－奥又白池（一六・三〇）

八月十二日（雨）停滞

八月十三日（雨）”

八月十四日（雨）”

八月十五日（雨）テント撤収出発（八・三〇）－高松ルンゼ下り切る（九・五〇）－明神池養魚場（一二・〇〇～一二・一五）－河童橋（一三・三〇）

○千丈沢より蒲田川へ（八月十五日～十九日）

久保先輩、坪井

八月十五日（小雨）大町（九・〇〇）－葛（一〇・〇〇）－濁（一二・四〇）－東沢（一三・五〇）－コシノ沢（一五・一〇）－湯俣（一六・〇〇）－宮田小舎（一七・二〇）

八月十六日（風雨）小舎（六・〇〇）－小次郎沢（七・〇〇）－西鎌尾根（一一・一〇）－肩小舎（一二・三〇）

八月十七日（風雨）停滞

八月十八日（風雨）小舎（七・三〇）－槍頂上往復－小舎（八・一〇） 肩小舎（八・一〇）－瀧谷出合（一〇・四五）－瀧谷偵察－出合発（一一・四五）－白

出沢（一三・一〇）－柳谷（一四・一〇）－小鍋谷（一五・〇〇）－槍見温泉（一六・五〇）

八月十九日（小雨）温泉（六・〇〇）－栃尾（七・四五～九・〇〇）－平湯（一〇・二〇～一一・〇〇）－高山（一三・二〇）

計画は天丈沢より北鎌尾根をねらったのであるが、予期せざる悪天候のため千丈沢にルートをとった。宮田小舎は期待に反し無人の全くの掘立小屋で、寝具もなくビバーク同然の一夜を明かした。

○道場（八月十二日～十三日） 土屋、木村

○大峯山脈（十月十日～十三日） 関本、他二人

十月十日（快晴）川合（一一・四五）－弥山川出合（一三・一五）－弥山川第一の瀧より半キロ先よりバック－弥山川出合－新川出張所（一六・四五）

十月十一日（快晴）宿泊地（六・三〇）－行者還峠（八・四五）－弥山（一三・〇〇）

十月十二日（晴後曇）弥山（七・四五）－佛生岳（一一・三〇）－弥山（一五・二〇）

十月十三日（晴）弥山（七・二〇）－狼平（七・五〇）－双門ノ瀧（一〇・〇〇）－弥山川出合（一五・〇〇）－川合（一五・四五）

○穂高——冬山偵察秋山合宿——

目的①西穂－奥穂－前穂－明神最南峯間の稜線、出来れば更に北穂までの偵察

②上高地へ荷上げ

メンバー 川島、尾藤、立花、三枝、大島 OB

十一月一日 一七・三〇 大阪発

十一月二日（曇）上高地迄、米、テント、ザイル、ワカン、等装備を荷上げする。更に岳川森林帯のテント場にキャンプ（一六・〇〇）

十一月三日（晴）

A. 尾藤、立花

ベースキャンプ（八・三〇）－水呑沢（一〇・〇〇～一〇・二〇）－天狗コル（一三・〇〇）－間岳（一四・〇〇）－西穂（一六・〇〇）－西穂小屋（一七・〇〇）－テント（二〇・〇〇）

新雪は岩陰に点々と見られるばかりで、まだ十月の様な秋山アイゼンまで用意して来た我々の十一月の山に対する考へも少しは変へて行かなければならない様だ。雪の全然残っていない天狗沢は全くいやな所だ。西穂の稜線を歩き乍らこれは冬は仲々容易でないと思った。更にこちらから明神及び取附の前明神沢を偵察する。西穂小舎に到着した時、丁度小舎を了ふ所で、主人からねんごろにもてなされ、感激して暗くなった道を上高地へ下った。

B. 川島、三枝、井上、大島 OB

前穂往復

十一月四日（晴）

A. 尾藤、立花

テント（八・〇〇）－前穂頂上（一二・三〇）－明神二峯（一四・三〇）－最南峯（一六・三〇）－岳沢（一八・〇〇）－テント（一八・三〇）

明神側の稜線で問題になるのは二峯岩峯の北側トラバースであらう。四十米のザイルの固定あれば充分。

最南峯登路として、雪崩の問題は雪が少ないと思はれるので余り大した事がないだろう。沢に木がある事から、又登路全体としても特に悪物はない。下から一気に肩の部までテントを進めるに適してゐると思はれる。

又明神の稜線は岩と雪に余り慣れてゐない阪大には、これからやるに適してゐると思はれる。

待望の奥又の池、ヒョウタン池を見た。明神東稜の上部は物凄い所だ。

B. 川島、大島 OB

天狗－奥穂－前穂－テント

C. 井上、三枝

明神池

十一月五日（曇時々雨）

上高地へテント下げ、大島、立花、井上帰阪す。

川島、尾藤、三枝、横尾岩小屋に入る。

十一月六日（晴后雪）

岩小屋（六・三〇）－涸沢小舎（八・四〇～九・〇〇）－奥穂小舎（一〇・三〇～一一・〇〇）－涸沢岳（一一・三〇）－北穂小舎（一三・三〇～一四・〇〇）－北穂高沢をへて岩小屋（一五・三〇～一六・〇〇）－木村氏宅（一九・〇〇）

稜線では猛烈に吹きつけられた。涸沢岳の下降にアイゼンなく、三枝一人涸沢岳のコルから先に帰らしめ、二名で北穂小舎に入る。お互に冬の事を考へながら。

下山は猛烈をきはめた。八日迄に帰宅せねばならない私は出来れば中の湯まで下っておきたかったが。

十一月七日（晴）

木村氏宅（六・三〇）－沢渡（九・〇〇）－帰阪

（尾藤記）

○比良山行（十一月七日） 椎木、関本

○穂高（十一月十四日～二十二日）

坪井、田島 OB

十四日 大阪発（一七・三〇）

十五日（晴）松本（四・〇〇）－島々（九・三〇）－上高地（一二・三〇）

十六日（雨）上高地（七・三〇）－明神館前（八・三〇）－徳沢（一〇・〇〇）－横尾（一一・三〇）

十七日（晴後曇）横尾（八・三〇）－本沢橋（九・〇〇）－涸沢ボーデン（一二・三〇）－涸沢小舎（一五・三〇）

一週間前の山本、広橋の報告と様相一変、北尾根の腹で膝、涸沢ボーデンからは足の付け根迄のラッセルに苦しみ大いに消耗する。

十八日（晴後曇）小舎（八・〇〇）－ザイテングラード取附（一〇・〇〇）－穂高小舎（一二・〇〇～一二・三〇）－奥穂頂上（一三・一五）－穂高小舎（一三・四五）－小舎（一五・三〇）

ザイテングラードもラッセルが甚しい。奥穂稜線は風強く粉雪を叩きつけられて氣勢を挫かれる。

十九日（雪後曇）涸沢小舎（一〇・〇〇）－横尾（一五・〇〇）

二十日（晴後曇）横尾（一〇・〇〇）－上高地（一六・〇〇）

二十一日（晴）上高地（七・〇〇）－前明神沢（八・三〇）－尾根筋（九・四五）－最南峯頂上（一三・〇〇）－昼食（一三・三〇～一四・〇〇）－ルンゼを誤り時間をくふ－前明神沢出合（一六・三〇）－上高地（一八・三〇）

上りはルートを誤り尾根筋に早く出過ぎて急斜面のブッシュに苦勞する。前明神沢經由最南峯への最良ルートは可成登った地点より入るルンゼを利用す

る。特徴としては両側がブッシュで真中が切拓きの様に通っている。それを登って滝を正面にして開けた所で右手ルンゼに移れば尾根筋へ簡単に出来る。尚最南峰直下には広い所があり充分天幕の二つ三つ張れるだらう。

二十二日（小雪後曇）上高地（一〇・〇〇）－沢渡（一四・〇〇） 下山

（田島記）

○冬山合宿（一二月二二日～（一九五四年）一月一〇日）

本文参照

○上高地、奥穂高（一月）

○木曾駒ヶ岳（一二月三一日～一月三日） 椎木、関本

十二月三一日（晴 -0.7℃）上松－清一郎氏宅－敬神小屋

一月一日（快晴 -11.8℃）宿泊地（九・二〇）－五合目小屋（一二・二〇）

二日（晴後小雪 -7℃）宿泊地（六・三五）－遠見場（八・五〇）積雪八〇糎  
－前岳（一〇・一〇）－玉の窟（積雪二米）－遠見場（一三・一五）－五合目小屋（一四・四〇）

三日（晴）宿泊地（一一・三〇）－敬神小屋（一三・〇〇）－清一郎氏宅（一五・三〇）

○洛西地蔵谷スキー（二月九日） 久保 OB

○黒部偵察（失敗）

川島、山本光、土屋、久保 OB、田島 OB

三月十六日 大阪発

十七日（晴）松本（一二・〇〇）－大町（一三・二〇）－大出（一六・〇〇）  
－黒沢営林署小舎（一八・三〇）

十八日（晴）小舎（八・三〇）－白沢出合（九・〇〇）－扇沢出合（一一・三〇～一二・三〇）  
－新越尾根末端デポ（一四・〇〇～一四・三〇）－大沢小舎（一五・三〇）

所によって積雪の多少はあったが、白沢、扇沢で流れが雪の下になっていたのは好都合だった。鳴沢出合附近は冬に大きなデブリが出てその上に雪が積もったらしく快適な広い斜面を形成してみた。

十九日（高曇）小舎（九・〇〇）－デポ（九・一五～九・四五）－昼食（一一・四五～一二・三〇）  
－稜線（一六・〇〇）－岩小屋沢岳ピーク（一六・三〇）－山本、久保 OB 大沢小舎に下る－テント（一八・一〇）

調子悪く新越尾根の登りに時間をくう。

岩小屋沢岳支脈は予想通り可成りのラッセルだ。上部では東方に雪庇なども発達してあるが、巾も可成り広い。下ると間もなくカンバと針葉樹の交る森林帯になるが、木は専ら西斜面に生え尾根筋はあいている。テントは一下りして、ここから尾根がしばらく傾斜を失って続く所の一寸したコル状の地点に林を風上にして建設する。

二十日（雪）川島、土屋、テント（一〇・三〇）－三角点より少し西方へ下った点（一二・三〇）－テント（一三・三〇）

調子の悪い田島を残し偵察にいくも視界悪く果さず。しかし粉雪舞う“もみ”の木の林に兎が飛び出したり Wander land をさまよってある様。

二十一日（雪）停滞、食糧の窮迫を発見。

二十二日（晴）テント（一〇・〇〇）－昼食（一二・三〇～一三・〇〇）－稜線（一三・三〇）－新越尾根ジャンクション（一四・〇〇）－籠川谷（一六・〇〇）－大沢小舎（一七・三〇）

折角晴れたのに一寸した手違ひによる食糧不足から撤収せねばならぬことは甚だ残念。しかし天気は飽迄よく且暖い。劔や立山のすばらしい姿、お伽の国の様な内蔵ノ助平手にとる様に見える。しかし別山沢には雪崩の音が絶えない。大沢小舎で久保 OB、山本も連日の降雪に空しく下山した事を知る。

二十三日（晴）田島、土屋、小舎（一二・〇〇）－扇沢（一二・三〇）－白沢（一三・三〇）－寄沢（一四・〇〇）－大出（一六・〇〇）

午前中新越沢でスキーを楽しみ午後下る。結局何も出来ず至極残念。

二十四日（曇）川島、小舎（一〇・〇〇）－大町（一六・〇〇）

## B 隊春山合宿報告

（本文“春の黒部へ”の地図、偵察状況を参照）

尾藤（L）、穴戸、広橋、山本進、西川、三枝、岩永

三月二七日 大阪発

二八日（曇後雨）住吉都合悪く不参加となり、計画を縮小して本合宿の主目標を小規模な黒部偵察に変更する。

大町（一二時）大出（二時半）雨の中を入り、黒沢出合少し下手の河原の無人小舎に入った。（一五時半）

二九日（雪）小舎を八時半出発。麓川も扇沢出合を過ぎると風雪となり、先頭が大沢小舎二じゃいたのは四時なるも、最後尾は八時半だった。風雪の中では、殊に好ましくないことであった。本日宍戸単身で大町より我々に追付く。

三〇日（快晴）広橋、西川を小舎に置いて他は新越尾根肩迄荷上げ。

三一日（高曇）偵察隊（尾藤、宍戸、山本）、サポート（広橋、西川）、ハウスキーパー（三枝、岩永）大沢小舎九時半出発。岩小屋沢岳南肩ピーク（一四時）でサポートは分れ、偵察隊は中尾根下降、高度約一八五〇米位の所にA.Cを設けた。（一六時）

四月一日（晴）

○偵察隊 九時半三名にてA.C出発。雪溪を下り途中の小滝で時間を要し、二股一時半に着く。新越沢下降Ⅲ曲部に一三時半到着。左岸のトラバースを試みるが不能と断じ一五時引返す。A.C一八時に帰る。

○大沢パーティ 広橋、西川、岩永、三枝  
岩小屋沢岳に登る。

小舎発（八・五〇）新越乗越（一二・五〇～一三・一〇）－岩小屋沢岳（一五・〇〇～一五・三〇）乗越（一六・三〇）小屋（一八・二〇）

二日（ガス後晴）

○偵察隊 休養

○大沢パーティ 休養、スキー練習

三日（晴）

○偵察隊 尾藤、宍戸の二名にて下降

A.C八時出発、二股八時半、Ⅲ曲部滝上に九時半到着す。其処より雪溪を急登して岩小屋沢岳支脈末端に立つ。当尾根をドーム迄上下して黒部を偵察す。（偵察状況略図は本文参照の事）A.Cに午後五時に帰幕す。

○大沢パーティ

小屋発（四・五〇）途中ワカンをアイゼンに変え、針木峠着（七・五〇～八・五〇）小屋は屋根が出ており、入口が開いて中は天井迄雪が一杯つまって

る。雪をかき出して四人入った。小屋発（八・五〇）蓮華岳頂上（一〇・三〇）－風強い為直ちに引返す。小屋帰着（一一・四〇～一三・〇〇）三枝嬢一人残して三人で針ノ木岳に向ふ。アンザイレン、尾根はフワフワの粉雪が全然雪庇も作らずに鋭い刃状にあり、アイゼンは団子になり、ピッケルはきかず、慎重に一步一步と尾根の右手をとって進んだ。以外に時間が掛り針ノ木頂上（一五・二〇～一五・四〇）帰途はトラバースして小屋（一六・三〇）着。大沢小屋（一八・一〇）

四日（晴）A.C 撤収。一三時半出発。一七時半大沢小屋に帰り久方ぶりに全員顔を合して、行った山の話しに夜遅く迄花を咲かせる。

五日（高曇）大沢合宿を終了して引上げた。

大沢（九・三〇）大出（一二・〇〇）大町（一六・〇〇）大町まで歩かねばならなかった。

## 春山合宿後記

偵察隊を反省して 滝のある事の分つてゐた新越沢下降は、第一歩からして間違つて居り、岩小屋沢支脈で黒部に近付く所期の構想からは、当然当尾根を下降すべきであつた事。又 A.C の位置及び高度が高きに過ぎ、あの様な場所、状態の所で黒部に到らうとするならば、出来る限り A.C を黒部に近付けねばならない事。又偵察行動の如何により移動し得る A.C ならしめる為に岩小屋沢岳支脈を下降すべきであつた事等が特に強く反省せられる。とも角 A.C を出来るだけ（黒部に到る所要時間からのみ考ふべきではない）黒部に近付ける事は、必須の事と思ふ。

鳴沢右岸に黒部から上ってくる夏道の事を春山以後に正確に知つたといふ不勉強さは鳴沢岳からの尾根を下らなかつたといふ大きな失敗をしてつた。根本的な面に於ける怠慢には誠に面目ない次第である。

又大沢パーティに残つた春山始めての人達には、春山としてのトレーニング特に高処雪中天幕、雪洞生活を行へなかつた事は残念であるが、好天に恵まれて春山を可成歩き、味はへた事は幸運であつた。しかしこの好天の春山を以て、春山を認じて了はない様特に留意されん事を切に望んで止まない。

（尾藤記）



○白馬岳（三月二一日～二四日） 関本他一人

三月二一日（小雪後風雪）四ツ谷（八・四〇）－二股（一一・三〇）－途中からスキー－中山沢出合（一六・〇〇）－猿倉平ビーバック（一八・二五）

二二日（晴 -7℃）ビーバック地（八・〇〇）－猿倉小屋（八・二〇）－ビーバック地－猿倉－B地（一〇・〇〇）－白馬尻（一一・四五）－猿倉（一二・三五）

二三日（快晴 -5℃）猿倉（七・四〇）－白馬尻（九・一五）－スキーデッポ（一三・〇五）－村営小屋（一五・一五）－D地（一六・二〇）－猿倉（一八・二〇）

二四日（雪 -4℃）猿倉（一一・三〇）－四ツ谷（一五・一五）

極小規模な表層雪崩が白馬側からひんぱんに起っていたのみ、三合目、杓子側は無事であった。

○大峯山（四月四日～四月五日） 関本他一人

四日（晴後曇）上多古（一〇・二〇）－祖母谷ノゾキ（一五・一〇）－山上（一六・三〇）

五日（小雨）山上（一一・四五）－吉野口（一八・一〇）

○八方唐松（四月二日～四月四日） 久保 OB 他

○木曾駒岳（五月） 宮本 OB 他

○大峯山（五月） 東、近、辻川他

○愛知川・雨乞（五月一日～五月三日） 久保 OB 他

○六甲保壘（五月三日） 山本、関本

○惣合谷（五月二三日） 木村他

○六甲、大月谷（五月三〇日）

宍戸、広橋、木村、椎木、辻川、高木今

○大月谷、保壘（六月六日）

広橋、山本、尾藤、外二名

○ロックガーデン（六月一三日）

木村他二名

# 集会記録

六月五日

- ・エベレスト登頂並びにヒマラヤについて
- ・夏山合宿劔に決る。

六月一日 リーダー会

- ・総会打合せ。ナイロンテント購入についての寄附金対策。真砂沢合宿について  
具体的検討。
- ・冬山西穂、北穂にほゞ決定。

六月二〇日 第五回総会

- ・会長挨拶
- ・二七年報告（尾藤）
- ・装備報告（坪井）、会計報告（大村）
- ・二八年役員決定（会長篠田先生、リーダー川島、尾藤、山本、坪井、住吉、東。  
幹事徳永（医）、加藤（理）、松本（工）田島（法経））
- ・映画 関西登行会提供

六月二五日

- ・五一年エベレスト隊の偵察結果（尾藤）
- ・夏山計画（劔西面、下廊下）（川島）

七月二日

- ・夏山計画検討

七月九日

- ・ナンガパルバット征服に関して
- ・夏山計画検討

七月一日

- ・夏山準備会
- ・劔概説（大島、山本）

七月一四日

- ・夏山準備会

八月六日

- ・夏山中間報告会

八月一三日

- ・北鎌より西穂縦走計画発表（坪井）

八月二〇日

- ・夏山報告会

劔合宿（川島）、劔・穂高縦走（東）、内藏助平・黒部・南沢・槍へ（川島）、  
奥又白（山本）、千丈沢より蒲田川右俣（坪井）、劔山（鳴海）、涸沢（篠田先生）

八月二七日

- ・冬山、春山討議
- ・寄附金集めについて

九月三日

- ・冬、春山討議

九月一七日

- ・幻燈会
- ・冬山計画

十月一五日

- ・春の北穂並びに槍、蒲田川右俣（宍戸）慶応会報より（大島）

十月二二日

- ・立教部報より（木村）

十月二九日

- ・各大学山岳部の冬山計画（川島、尾藤、大島）秋山計画打合せ（尾藤、川島）

十一月五日

- ・秋山計画第二次（山本）

十一月一二日

- ・秋山報告（川島、山本）
- ・冬山計画概要発表（川島）

十一月一九日

- ・滝谷第二尾根（空中）岳川より滝谷へ（川島）
- ・冬山計画討議

十一月二六日

- ・秋山第三次報告（田島）冬の装備について論議
- ・冬山計画討議

一二月三日

- ・穂高周辺における極地法
- ・冬山計画討議

一二月一〇日

- ・冬山計画 装備（空中）会計（土屋）
- ・ラジウスによるパン焼き装置（川島）東京各大学の消息（大島）

一二月一二日

- ・食料計画（宍戸）
- ・トースター試用（山本）装備計画（空中）

一二月一七日

- ・テントの話
- ・冬山計画討議
- ・メンバー決定

一二月二四日

- ・冬山最終準備会

一九五四年一月一四日

- ・冬山報告会（行動概略・川島、装備報告・空中、食糧報告・宍戸、会計報告・土屋、寄附金に関する報告・尾藤）

一月二一日

- ・春山計画
- ・穂高行報告（大西）

一月二八日

- ・冬山反省会（装備、技術、天候）
- ・大峯山行報告（抱）

二月四日

- ・「岳人」に出す冬山報告について検討
- ・伊吹山スキー行計画（住吉）

二月二五日

- ・春山計画討議

三月四日

- ・大月谷岩登り計画

三月一一日

- ・ 第二回春山討議（黒部横断について具体案）

三月一三日

- ・ 春山計画討議並びに偵察隊の準備会

三月一八日

- ・ 春山計画

三月一九日

- ・ 春山計画
- ・ 新人募集

三月二五日

- ・ 春山計画
- ・ 偵察隊報告

◎一九五四年度

四月一五日

- ・ 春山報告会

四月二二日

- ・ 五月山行計画発表
- ・ 本年度役員決定（リーダー宍戸）

四月二二日 リーダー会

- ・ 事務分掌を決定
- ・ 本年度の方針について

四月二九日

- ・ 私鉄ストのため流会

五月四日

- ・ 本年度山行についての検討

五月一一日

・五月山行報告（木曾駒・壱中、大峯・近）

・最近の登山界の状態について

五月二〇日

・関西学連総会報告（尾藤）

五月二〇日 リーダー会

・夏山計画討議

五月二七日

・阪大山岳会の歴史（尾藤）

五月二九日 OB 総会（於大阪工業クラブ）

・昨年度の活動状況（尾藤）

・今年度の計画（宍戸）

・感想（先生、水野先輩）

出席者

篠田先生、水野、遠藤、新保、徳永、家田、松久、大島、久保、伊藤、山本、住吉、抱、宮本、近 各先輩  
尾藤、木村、宍戸



## 編集後記

◇時報もとうとうVI号になった。人にたとへればそろそろ小学校と云った頃である。I号から振りかへってみると、後立のラッシュに始まった我々の山行も本号で遂に冬の穂高のポーラー迄発展して来た。あの徳永、大島等創生期の人々の次の世代の総決算として冬山はとくに意義深いものがあらう。

◇今回は冬山と関連して尾藤兄に穂高を中心として極地法のスピード等に関して研究を発表していただいた。こういった方面を余り論じたものがなかっただけに非常に参考になるのではないかと思ふ。

◇ナイロンテントに関しては北海道の川島との連絡がうまくゆかず、在阪の者のみでまとめたため云ひ足りぬ点が多々あると思ふが、悪しからず御諒承願ひます。

◇会員名簿は今回より各方面の要望もあり戦前の先輩の方々も全部掲載しました。記載もれ、住所変更、間違ひがありましたら至急会へご連絡ください。

◇毎号のことではあるが、御多忙中御寄稿下さった篠田先生、色々御忠告下さった先輩諸兄に深く感謝します。

昭和二十九年六月  
大阪大学山岳会「時報」第四号  
発行所 大阪市北区常安町  
大阪大学学生会内  
大阪大学山岳会  
編集責任者 坪井圭之助  
印刷所 大阪市西区江戸堀北通二丁目  
美研社  
電話主任室(44)五〇〇八番

